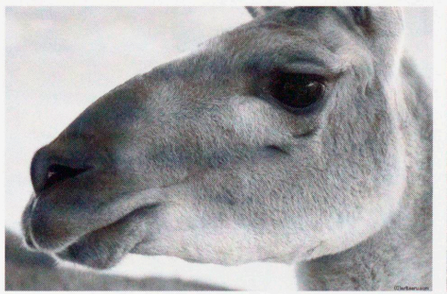
ふじみの

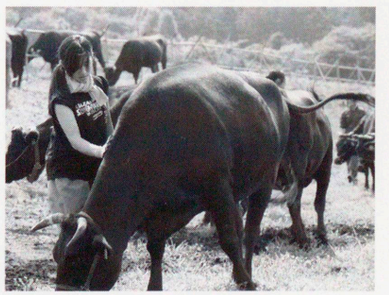


No.48

東京農大畜友会



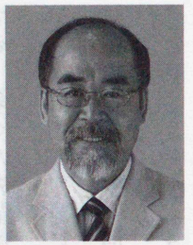






巻頭言

畜産学科長　鈴木敏郎



昨年は未曾有な東日本大震災や福島第一原発の事故が発生し被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げると共に、被害にあった地域の一日も早い復興をお祈りいたします。

さて、畜友会の機関誌「ふじみの」も昭和三十六年四月の創刊以来、本号で第四十八巻となります。「ふじみの」は新入生から卒業生まで、毎年畜産学科の重要な情報あるいは楽しい思い出を提供する機関誌ですので、是非一読していただくようお願いします。

卒業生の皆さん、ご卒業お目出とうございます。君たちにとって畜産学科の4年間はどのようなものでしたか。きっと非常に短くあっという間に過ぎてしまったと思います。しかし、その4年間は君たちの人生において良き友人や先輩・後輩に囲まれた、非常に充実した期間だったことでしょう。これから君たちが巣立って行く社会は、これまで君たちが経験したことがない、厳しく苦しいことが数多く待ち受けている世界です。そのような困難に直面した時に心の支えとなってくれるのが、大学時

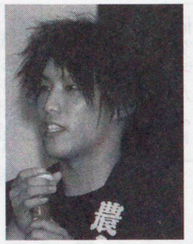
代の友人であり、畜産学科の教職員です。この絆が途切れることのないよう大切にしてください。また、卒業生の多くが社会に出て強く感じることに、農大ファミリーとしての絆の強さがあります。学科が違っても農大卒というだけで、色々の場面で助けてくれるのが農大ファミリーです。是非、農大畜産学科を卒業したことに誇りを持ち、農大ファミリーの一員として社会で活躍することを期待しています。

新入生の皆さん、ご入学お目出とうございます。この「ふじみの」を手にする時はこれからの大学生活、特に畜産学科での生活への期待と不安で心の中は揺れ動いていることでしょう。でも、大丈夫です。多くの先輩達も君たちと同じ気持ちで畜産学科に入学してきました。そして、4年間の大学生活を通して、勉学に励み、良い友人に巡り会い、素晴らしい大学生活を過ごしてきたのです。大学はこれまでの高校生活とは違い、自分自身で生活を管理していかなければなりません。最初のうちは少し戸惑うかもしれませんが、是非自分の生活スタイルを早く見つけ、充実した大学生活を送ってください。一日も早く大学生活に慣れ、畜産学科の一員として十二分に活躍されることを期待しています。

平成二十四年三月吉日

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　榊原啓太



菜の花の香り漂い、桜の芽も綻ぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第四十八号を発行することとなりました。

本誌には畜産学科の先生方および、学生たちの原稿や昨年度の事業報告を記載しています。昨年は、東日本大震災によって学生は大学の行事、就職活動、他にも様々な面で「不安」を抱えていました。しかし、その不安に負けない学生一人一人の「夢」「希望」が感じられる文章がのせられています。

是非、隅々までご覧いただけたら幸いです。

ふじみの　目次

巻頭言　畜産学科長　鈴木　敏郎　1

ふじみの発刊にあたり　畜友会委員長　榊原　啓太　3

同窓会だより
同窓会会長あいさつ　畜産学科同窓会会長　渡邉　誠喜　6

畜産振興会
東京農業大学畜産振興会便り　畜産振興会会長　半澤　惠　8

研究室だより
家畜繁殖学研究室　10
家畜育種学研究室　13
家畜生理学研究室　15
家畜飼養学研究室　17
畜産物利用学研究室　19
家畜衛生学研究室　21
畜産マネジメント研究室　24

ふじみの寄稿原稿（教員）
退職にあたって　小栗　克之　26
変遷する言葉　吉田　豊　27
10年間の教員生活を振り返って　花田　博文　28
退職に際して　佐藤　光夫　30

集う学友
あーーっという間に駆け抜けた日々！　4年　清水　涼祐　32
おれの4年間を聞いてくれ　3年　高野明日香　33
農大での日々を振り返って　2年　清瀧　健太　34
充実した1年間　1年　甲斐　瞳　35
農大一年の思い出

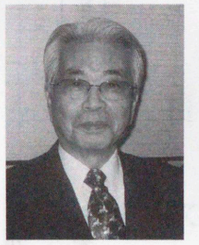
畜友会だより
平成二十三年度畜友会活動報告　36
平成二十二年度畜友会決算報告　37
平成二十二年度収穫祭特別会計収支決算報告　38
平成二十三年畜友会予算　39
平成二十三年収穫祭特別会計予算　40
平成二十三年度畜友会役員　41
第十二回厚木キャンパス収穫祭　42
第一二〇回体育祭事業報告及び結果報告　50
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第十二回厚木キャンパス収穫祭・第一二〇回体育祭各部門委員長より
本音。　統一本部委員長　3年　榊原　啓太　56
俺とっき、お前は？　特別企画委員長　3年　中塚　武利　57
NO MILK NO LIFE　宣伝隊隊長　3年　竹内　薫　58
今年の神輿作製記　神輿隊長　3年　佐藤　晋介　59
怒涛の日々　体育祭委員長　3年　青木　真帆　60
力強さを求めた櫓　櫓装飾委員長　3年　小林　由音　61
ミシンの神様　装飾委員長　3年　鈴木　雄太　62
最高の家畜苑　家畜苑委員長　3年　猪瀬　真宏　63

編集後記　編集委員長　3年　竹内　薫　64

同窓会だより

同窓会　会長挨拶



畜産学科同窓会・本学名誉教授
会長　渡邉　誠喜

昨年は3・11の大震災の後、津波・原発被害で多くの方々が被災され、亡くなられました方々のご冥福を祈り、被災者に対しお見舞い申し上げます。

兼ねてより懸念されていた環太平洋経済協定（ＴＰＰ）の問題も浮上してまいりました。今や地球上では環境・気候の急変により穀物生産量は激減し、各国は食糧防衛のため輸出を抑え、経済力にまかせて世界の穀物を買いあさるなど国際的に食糧や飼料資源不足が懸念されてきています。ＴＰＰへの参加も避けて通れない世界情勢でありますが、日本の食糧供給と農業の再生を考えたとき大変難しい局面に差し掛かっております。我が国の農業再生・維持には大胆な補助政策に加え、農業者自身に力を付与・活性化しかありません。遊休地・休耕田畑の活用、日本ならではの品質の高い農畜産物の生産、強力な農業者の育成こそが重要と思われます。食糧自給のみならず輸出する、という攻めの農業施策を忘れてはならないでしょう。

卒業生のみなさん　ご卒業おめでとうございます。

皆さんは学部四年間、または大学院二年間あるいは五年間、この東京農業大学厚木キャンパスにて勉学に勤しまれ、講義に、実験実習に、そしてクラブ活動に精励され、多くの友人を得られ、人格豊かな立派な畜産技術者として本日、目出度く農学士、農学修士あるいは農学博士の学位を取得されました。同窓生を代表して心よりお慶びを申し上げ同窓会への入会を歓迎いたします。また、この晴れの日を待ち焦がれていたご父母の皆様にも祝意を表したいと思います。

畜産学科は昭和二十二年四月に専門部畜産科として千葉県茂原市に千葉農学部として設置され、昭和二十四年に新制大学令により農学部畜産学科となり、昭和三十四年から三十六年にかけ世田谷キャンパスへ、そして再度平成十年から十二年にかけて厚木キャンパスへ移転しました。大学院は昭和六十一年四月に農学研究科に畜産学専攻修士課程として、平成二年に博士後期課程として増設されました。この間、学部卒業生は八千名を超え、多くの大学院修了者を世に送り出し、国の内外で畜産学・業界並びに関連産業界の中核となって華々しく活躍されております。

本同窓会は昭和六十三年に学科創設四十周年を記念して、会員相互の親睦と情報交換の場を提供することを第一義とし、併せて学生教育への援助を目的として設立されたものであります。平成二十一年秋に学科と同窓会の共催のもと学科創設六十周年記念式典を執り行い、約三百五十名の卒業生が全国から参集しました。また、学科の要望によりモニューメントを寄贈いたしました。このモニューメントは富士農場の正門に建立されておりますが、学科の現状と将来の発展を表現したものであります。学生・同窓生には大いに馴染んでいただきたく存じます。グロバリゼシオン謳歌のもと、生存競争厳しいなかではありますが、単に排他的にならず、「以和為尊」を旨とし、他を助けあう気持ちを持っていただきたい。卒業生諸君には厳しい社会情勢ですが、諸君の活躍の場は必ずあります。東京農業大学で培った学術・技術と農大スピリットをもって世のため、人のためにご活躍されることを祈念いたします。

新入生のみなさん　は多くの大学農学部の中から、この伝統ある東京農業大学畜産学科を選択、見事合格・ご入学されたこと心からお慶び申し上げ、大いに歓迎いたします。大学農学部の中で畜産学科という名称は本学が唯一となってまいりました。申すまでもなく農学は農・林・畜産業に関わる学問のみならず、環境・栄養など人間を取り巻く諸問題を解決するための生物のあらゆる可能性・特性を生かした「いのちの科学」、すなわち、農学は生命の根源を科学する学問分野であります。畜産学は食糧生産はもとより生命科学や環境科学をも包含し、更にはこれらのフロンティア部門をも開拓していく学問分野であります。

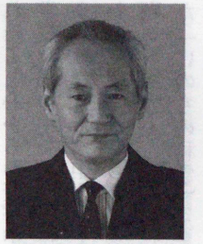
新入生諸君は今後、長い伝統の中で培われてきた農大精神を身につけ、文武両道を旨として勉学とクラブ活動などに精励され、生涯の友となる素晴らしい友人と良き恩師を見つけ楽しい大学生活を勝ち取ってもらいたい。そして、創意・工夫と自省を念頭に、常に思慮・分別を弁え、挑戦することを拒否せず、自己ＰＲ力を養うことにも心を配ってほしい、と思います。そして、四年後には農大畜産学科に在籍していた、という証を示せるよう証つくりに心掛けてください。

卒業生並びに新入生のご健闘を祈り、同窓会長のご挨拶といたします。

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会　便り

東京農業大学畜産振興会
会長　半　澤　　惠



東京農業大学畜産振興会が発足して、早二十一年が経ち「ふじみの」に便りを執筆する時期となりました。そこで本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介します。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可を得て設立されました。会の運営には学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることになっています。

具体的な事業内容として、奨学生を毎年一～四年次生の各学年から一名ずつ計三名、延べ六十四名採用、優秀卒業論文賞を毎年一名、計二十名に授与、姉妹校留学生並びに渡米農業実習生への交通費の一部を過去三名に支給、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生、延べ二百三十六名を表彰しています。また、経済的に困窮した学生への奨学金の一時貸与も行っています。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第十一期の学科学生ならびに第九期の博士前期課程大学院生、第六期の博士課程後期大学院生が卒業します。移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみという状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリャマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈しました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、黒毛和牛は優秀な二世も誕生するなど、それぞれ実習・実験の材料として活用されています。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも本年度で十四号を数えるまでになります。

本会設立の契機は平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜った原資を基金として設立されましたが、その後、逐次拡大してきた事業を遂行するため、

一　東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
二　賛助会員会費
三　一般寄付金

などを資産に加え賄われています。より一層の充実した事業展開のためには更なる原資が必要です。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。特に本会から表彰を受けた方々は本会の活動を心に留めおいて下さい。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念し、振興会便りとします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

家畜繁殖学研究室は門司恭典教授、桑山岳人教授、岩田尚孝准教授のご指導のもと、大学院生七名、四年生・三十三名、三年生・三十四名で構成され、生徒同士が協力し合いながら日々の研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜（ウシ、ブタ、ニワトリ、ウズラ）を利用して生殖生理のメカニズムを追究し、繁殖効率の改善に取り組んでいます。具体的には、生殖に関わる内分泌機構の解明、動物胚の生産や操作、細胞、精子、卵子および受精卵の保存、人工授精、受精卵移植の繁殖技術の確立をめざしています。

三年生は、生殖学の基礎的な知識、実験方法等を身に付けると共に大学院生や四年生の研究活動を補助しながら興味のある研究分野について理解を深め、研究テーマを決定します。

当研究室では国内や海外で行われる学会にも積極的に参加し、その成果を論文として関連学会に発表しています。

研究室の主な年間行事は、新入室員歓迎会（四月）、論文発表会（年数回）、収穫祭の文化学術展での研究発表、スポーツ大会（年二回）、研修旅行、卒業生送別会等があります。

繁殖学研究室は日々の研究、勉強と楽しい行事を両立しながら充実した研究室生活をおくっています。

指導教員	氏名	卒業論文題目
岩田 門司	阿部　真澄	ブタ卵胞のサイズが体外成熟中の卵子のATP含量に及ぼす影響
岩田 門司	伊藤　綾香	ブタ卵胞のサイズが卵子の体外成熟中におけるミトコンドリア数の変化に及ぼす影響
岩田 桑山	沖　愛弓	エストラジオールが加齢ウシ初期胞状卵胞卵子の体外発育に及ぼす影響
桑山 岩田	小倉　愛恵	培養条件がウシ初期胚のヒストンのアセチル化および発生に及ぼす影響
桑山 岩田	金子　美幸	ニホンウズラ精原幹細胞の遺伝子発現解析
岩田 桑山	黒田　昌伸	ニホンウズラ精原幹細胞の免疫蛍光染色について
桑山 岩田	幸地　勝喜	テストステロンが雌ニホンウズラの拘束ストレスによるコルチコステロン分泌に及ぼす影響
桑山 岩田	小鷹　文子	ブタ卵子の体外成熟培養に伴う卵子直径とATP含量の変化
門司 岩田	佐藤　大地	ブタ前胞状卵胞由来卵子の体外発育能とエストラジオール産生能との関係
桑山 岩田	佐藤　匠	ブタ体外発育卵子の透明帯形成について
岩田 桑山	佐藤ちひろ	ウズラ受精卵へのプサルファン投与が性腺発達に及ぼす影響
桑山 岩田	柴崎　夏紀	岐阜地鶏の就巣行動の継続と抱卵斑との関係
桑山 岩田	清水　涼祐	ブタ初期胞状卵胞由来卵子の体外培養条件の確立
岩田 桑山	染谷　祐司	ウシ卵管上皮細胞に接着した精子のミトコンドリア活性の変化
門司 岩田	竹内　早来	ブタ卵胞の大きさが卵子のクロマチン構造変化におよぼす影響
岩田 門司	竹尾　駿	ウシの加齢が顆粒層細胞の性状に及ぼす影響について
岩田 桑山	恒松　数磨	エストラジオールがウシ初期胞状由来卵胞卵子のミトコンドリア数に及ぼす影響
岩田 桑山	中村　有美	エストラジオールがブタ前胞状および初期胞状卵胞由来卵子の体外発育に及ぼす影響
桑山 岩田	名古屋拓麻	ウシ卵胞のサイズが顆粒層細胞の性状に及ぼす影響
岩田 門司	西之園恵子	ウシの加齢が卵子の体外発育能および卵管上皮細胞に及ぼす影響
岩田 桑山	橋本　興平	テストステロンが雄ニホンウズラの拘束ストレスによるコルチコステロン分泌に及ぼす影響
桑山 岩田	藤井　里美	ウシ発情周期中における卵管上皮に占める分泌細胞と繊毛細胞の割合の検討
門司 岩田	前崎　元気	ウシ卵管上皮細胞と精子の接着が細胞のATP含量に及ぼす影響
門司 岩田	松岡いづみ	ウシ卵管上皮細胞の分画方法の検討
門司 岩田	峰尾　桃子	ニワトリの不妊化処理方法の検討
桑山 岩田	邑上沙瑶子	加齢がウシ卵子および初期胚のヒストンのアセチル化に及ぼす影響
岩田 桑山		

望月あかね	エストラジオールがブタ体外成熟卵子の ミトコンドリア数の動態に及ぼす影響	岩田 門司
安中　孝明	パーコール密度勾配遠心分離処理がブタ 精液中のＹ染色体を有する精子の割合 に及ぼす影響	門司 岩田
山本　千尋	加齢がウシ初期胞状卵胞由来卵子の質に 及ぼす影響	岩田 桑山
吉中　伸幸	夏期ブタ精液のパーコール密度勾配遠心 分離処理が精子性状に及ぼす影響	岩田 桑山

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、花田博文教授をはじめ、野村こう講師、高橋幸水助教の指導の下、大学院生3名、4年生30名、3年生35名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。

主な研究テーマとしては家畜（ウシ・ヤギ・スイギュウ・ブタ）を供試動物として、血液蛋白型支配遺伝子情報・マイクロサテライトマーカー・ミトコンドリアＤＮＡ遺伝子情報・Ｙ染色体遺伝子情報による系統遺伝学的研究、品種分化に関する研究などが行われています。

研究室では新入室員歓迎会、定期総会、収穫際への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会に加え、毎週ゼミを実施しています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生により学会発表などが精力的に行われています。

氏　名	卒業論文題目	指導教員
安久井麻里江	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村 花田
猪狩　祥	マイクロサテライトＤＮＡ多型情報を用いた家畜ヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
伊藤　千沙	Ｙ染色体マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋 花田
岩崎香菜子	マイクロサテライトＤＮＡ多型情報を用いたブタの系統遺伝学的研究	野村 花田
梅村　直美	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村 花田
岡本　丈寛	Ｙ染色体遺伝子情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋 花田
荻田あつみ	ミトコンドリアＤＮＡ全領域に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
上代　香織	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村 花田
勝又　良晃	ミトコンドリアＤＮＡ　D-loop 領域情報に基づくブタの系統遺伝学的研究	野村 花田
河村　直哉	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析	高橋 花田
小久保　弦	マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋 花田

小林　麗雪	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析	高橋　花田
佐藤　大祐	マイクロサテライトDNA多型情報を用いた東アジア在来牛の系統遺伝学的研究	高橋　花田
清水　宏樹	ミトコンドリアDNA全領域に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村　花田
下山　侑士	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析	高橋　花田
杉本　千紘	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村　花田
鈴木志穂美	マイクロサテライトDNA多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋　花田
塚田　健人	Y染色体マイクロサテライトDNA多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋　花田
辻内　祐美	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村　花田
成田　麻美	マイクロサテライトDNA多型情報を用いたブタの系統遺伝学的研究	野村　花田
南條　彩夏	ミトコンドリアDNA D-loop領域情報に基づくブタの系統遺伝学的研究	野村　花田
西　奈津美	マイクロサテライトDNA多型情報を用いた家畜ヤギの系統遺伝学的研究	野村　花田
馬場　裕之	マイクロサテライトDNA多型情報を用いた東アジア在来牛の系統遺伝学的研究	高橋　花田
平岡　純	頭蓋骨画像情報解析によるヤギの品種分化に関する研究	高橋　花田
福井　雅宏	ヤギ周年繁殖関連遺伝子の多型解析	野村　花田
堀切　飛鳥	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村　花田
松崎　彩子	ヤギ周年繁殖関連遺伝子の多型解析	野村　花田
松本　聖平	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村　花田
宮本　恵輔	マイクロサテライトDNA多型情報を用いた東アジア在来牛の系統遺伝学的研究	高橋　花田
山中　美優	Y染色体遺伝子情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋　花田

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤惠教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師のご指導のもと、大学院生5人、学部四年次生30名、学部三年生次生30名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしており、①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ダチョウに関する研究、③ウシに関する研究に大きく分けられます。①においては、季節や運動量の変化による血液性状の変動、赤血球の分化・成熟に伴い発現が予想される遺伝子に関する研究などをしています。②においては、タンパク質合成やストレス応答において重要な分子シャペロンのHSP70，90の遺伝子解析、血球性状の寄生虫感染と非感染での系統による差、主要組織適合遺伝子複合体（MHC）の分子遺伝学的解析、腸内細菌と自然免疫との関連解析としてのTLR遺伝子の解析などを行っています。③においては、ビタミンA代謝における諸所の現象に関する研究を行っています。

本研究室における日々の活動を紹介すると、三年次には生理学に関する基礎的な知識、技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習を行うとともに、実験動物の飼育管理、院生・学部四年生の卒業論文の補助として協力しています。四年次には三年次までに得た知識・技術をもって、各人が興味を持った前述の①から③の研究を引き継ぎ、あるいは新規テーマを先生との議論により決定し、卒業論文作成の目標にむかって遂行しています。院生は自分の学位論文のテーマに対して日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化学術展・模擬店、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年二回の納会、実験動物・家畜舎大掃除、週一回のゼミナール等があります。

氏名	卒業論文題目	指導教員
青木明日香	ニホンウズラ *DEF*, *NK-lysin*, *HSPA2* および *TLR2.4* 遺伝子のFISHによる染色体マッピング	半澤　原
青木　将平	ニホンウズラB系の腸内細菌叢の寒天培養法による同定	半澤　原
打越　沙織	ウマ赤血球の分化成熟段階における *GATA-1,2* 遺伝子のmRNA発現解析	半澤　原
遠藤　優	ニホンウズラB系の補体活性化3経路の各補体価	半澤　原
大賀　淑子	ニホンウズラのMx遺伝子の多型解析	半澤
加藤　裕香	ニホンウズラ幼雛の各種臓器における免疫染色による *TLR2* 局在解析	半澤　原
光田　圭吾	*CjHSP90AA1* のintronの多型解析	半澤

小重　萌実　乳牛の周産期における血漿中ビタミンAとβカロテン量の変動　半澤　吉田
小原ゆう子　乳牛の周産期における脂肪代謝に関する研究　半澤　吉田
近田　直史　ウズラ肝上皮系由来不死化細胞株QHEC3のinsulin応答性の解析　半澤　原
彭城　隼希　ニホンウズラHSP90遺伝子(*CjHSP90α*)のORFにおける多型解析　半澤　原
佐々木一真　ニホンウズラCD8β遺伝子の多型解析　半澤　原
佐藤　亮太　ニホンウズラMHC領域DMB1遺伝子の多型解析　半澤
佐野　翔一　ニホンウズラB系における腸内細菌の16SrDNAによる菌種の同定　半澤　原
三本松　翠　ニホンウズラHSP70遺伝子(*CjHSPA2*)の3'UTRの多型解析　半澤　原
菅原　拓海　ニホンウズラ*CD1*の多型解析　半澤
杉山由香理　ニホンウズラにおける練り餌による増体重と産卵率の改善　半澤
高館　篤史　ニホンウズラB系の腸内細菌叢の寒天培養法による同定　半澤　原
都野　哲平　ニホンウズラB系の血球性状　半澤　原
長嶋　宏宜　ニホンウズラMBL遺伝子の多型解析　半澤　原
野島　結　ダチョウ(*Struthio camelus*: Sc) HSP70遺伝子(*ScHSPA2*)の塩基配列の解析　半澤　原
濱根　雄　競走馬の運動内容及び状態別における赤血球浸透圧脆弱性と血液性状の年間変動　半澤
林　寛士　乳牛の周産期における血液性状と一般所見の変化について　半澤　吉田
松元　雄太　ニホンウズラ*TLR15*の多型解析　半澤
村田　真平　ウマ赤血球の分化成熟段階におけるGATA-1,2遺伝子のmRNA発現解析　半澤　原
由里本知宜　ニホンウズラMBL遺伝子の多型解析　半澤　原
横山　寛朗　ニホンウズラMBL遺伝子intronの塩基配列の解析　半澤　原
渡辺　未来　競走馬の運動内容及び状態別における赤血球浸透圧脆弱性と血液性状の年間変動　半澤
立石　健太　染色体凝縮におけるコンデンシンの作用とそれに関わる諸因子についての調査　半澤

家畜飼養学研究室

飼料と管理、栄養の3本柱を中心に環境への配慮も含め安全で効率的な畜産物の生産をめざし追求しているのが家畜飼養学です。本研究室では、脂肪をエネルギーとして燃焼するのに必要なカルニチンや抗酸化作用を持つ茶屑などを与えた際に家畜に及ぼす影響を研究しています。他にも、未利用資源の飼料化、アミノ酸要求量の推定、家畜による環境への負担の軽減など幅広く研究しています。

各研究は祐森誠司教授、池田周平教授、黒澤亮助教の指導のもと大学院生と共に日々研究を行っており、卒業論文としてはもちろん、成果は学術研究会の場で毎年発表されています。

研究室活動は、室員交流や団結のための歓迎会や納会など様々な行事、家畜生産現場へのインターンシップや研修旅行での畜産関連施設見学、飼料成分分析実験、収穫祭への参加（本年度　模擬店：コロコロ焼き、文化学術展：美味しい豚肉生産の秘密～第一歩は飼料から）などがあり、研究室生活は充実し室員は楽しく過ごしています。先生方は実験や実習の場でも、行事においても厳しく指導してくださるので、勉学、畜産管理技術から卒業後必要になる知識や考え方まで学ぶことができ学生として、人間として成長できます。

氏名	卒業論文題目	指導教員
青木　啓太	Basic Animal Nutrition and Feeding -Dogs and Cats, fish, and Wiled Animals- の翻訳	祐森　池田
阿久沢拓矢	オリーブ油製脂肪酸カルシウムの給与が肉用牛筋間脂肪の脂肪酸組成に及ぼす影響	祐森　池田
朝倉　昇	異なる油脂を利用した飼料へのL-カルニチン添加がラットの成長に及ぼす影響	祐森　池田
石川　清隆	海草飼料化における加工について	祐森　池田
井田　佳祐	食糞行動を阻止した日本白色種成兎におけるリジン・バリンの要求量推定	祐森　池田
遠藤　譲治	環境温度の変化と泌乳牛の血漿中L-カルニチン濃度及び泌乳量との関係	祐森　佐藤
大石　悠生	盲腸切除ラットへのイソカプロン酸給与が成長に及ぼす影響	祐森　池田
小川　沙織	食糞行動を阻止したダッチ種成兎におけるリジン・バリンの要求量推定	祐森　池田
小野寺知也	甘藷と茶屑を利用した配合飼料給与が梅山豚の血液性状に及ぼす影響	池田　佐藤

糟谷　覚　牛用精子保存液へのL-カルニチン添加が凍結融解後の精子生存指数および形態に及ぼす影響　祐森　野口

勝又　輝行　乳用子牛の血漿中L-カルニチン濃度と成長の関係　祐森　佐藤

川瀬　貴博　甘藷と茶屑を利用した配合飼料の消化性とその給与が梅山豚の成長に及ぼす影響　池田　野口

河村　勇介　低温環境下におけるブロイラーの卵黄の消費について　黒澤　池田

菊池　忍　L-カルニチン添加飼料給与が肉用繁殖牛の泌乳量と子牛の成長に及ぼす影響　祐森　佐藤

郷　智成　肥育豚へのL-カルニチン給与が成長及ぼす影響　池田　祐森

小林由希恵　利用前の敷きワラ洗浄が利用後のアンモニアガス揮散に及ぼす影響　祐森　池田

菅野　明葉　L-カルニチンを添加した保存液で培養した豚精子の精子活力に関する研究　祐森　野口

杉山　絵美　寒冷環境下の子豚へのL-カルニチン・脂肪酸カルシウム給与が成長に及ぼす影響　池田　祐森

成田　悠　盲腸切除ラットへの酢酸給与が成長に及ぼす影響　祐森　池田

蜷川　友磨　肥育豚へのL-カルニチン給与が枝肉性状および肉質に及ぼす影響　池田　祐森

畠山　正太　飼料資源としての海草の一般成分について　池田　祐森

肥田亜由美　L-カルニチン添加飼料給与が肉用繁殖牛の乳成分に及ぼす影響　祐森　池田

船江　泰介　ミネラル無添加飼料へのフィターゼ添加が成兎の体重維持に及ぼす影響　池田　祐森

味埜　美紀　甘藷と茶屑を利用した配合飼料給与が梅山豚の肉質に及ぼす影響　池田　祐森

柳原　和馬　給与飼料中脂肪酸組成の違いが夏季における産卵鶏の産卵率と卵殻質に及ぼす影響　黒澤　池田

山内　浩平　日本白色種成兎の育毛に対する飼料中Met・Thr量の影響　祐森　池田

工藤　智和　豚糞へのアフピリン噴霧による衛生害虫忌避効果　池田　野口

東　孝一郎　東京都における酪農経営の問題点および解決策の検討　池田　祐森

中村　憲一　福島県内の肉用牛の血統と血中カルニチン濃度との関係　祐森　佐藤

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の鈴木敏郎教授をはじめ、多田耕太郎准教授、中村優助教のご指導のもと、大学院生3名、研究生2名、大学4年次生33名、3年次生37名で構成される室員が、それぞれ活発に日々の研究活動などに取り組んでいます。

具体的には、乳・肉に含まれる各成分の物理・化学的特質ならびに栄養・生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究したり、その研究成果を食品成分の機能性・保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発などに応用するための研究を行なったりしています。

年間の主な活動としては、週一回行われるゼミナールの他、ハム・ベーコンの製造と収穫祭での販売、卒業論文発表会、新入生歓迎会、前・後期納会、研修旅行、卒業生送別会などがあります。

氏名	卒業論文題目	
		指導教員
嶋田　翔太	超高圧処理後に形成されるアクトミオシンゲルの構造に関する研究	
細川　泰知		
須永　幸	超高圧処理が卵黄・卵白のゲル形成に与える影響に関する研究	
長谷川瑞季		
長内　恵利	超高圧処理を用いたネムチュアの製造に関する研究	
樋口　誠		
増井智佳子	超高圧処理後の肉色変化に関する研究	
松崎真紀子		
塩野谷由香	GABA生成乳酸菌をスターターとした生ハムの製造に関する研究	
田口　貴博		
石川　瞳	鶏骨エキス抽出残渣を利用した食品の開発に関する研究	
大谷真奈美		
根岸　大地	豚骨エキス抽出残渣を利用した食品の開発に関する研究	
伊藤慎之介	畜産副産物を用いた発酵調味料の開発に関する研究	
松井　淳		
黒田　満久	山羊肉の理化学的性状に関する研究	
松井　孝文		
渡部　友衣	畜産物を用いた高齢者向け食品の開発に関する研究	
古地　佑介	超高圧処理を用いた豚心臓ソーセージの製造に関する研究	

安藤　大祐	GABA生成乳酸菌を用いたサラミ
佐藤　裕起	ソーセージの製造に関する研究
風間　裕希	GABA生成乳酸菌を用いたヨーグル
西村　勇人	トの製造に関する研究
北薗　愛	GABA生成乳酸菌を用いた豆乳ヨー
弓田菜々美	グルトの製造に関する研究
小澤　公彦	動物性および動物性乳酸菌を用いた豆乳
越智　雄平	ヨーグルトの製造に関する研究
鈴木　麻琴	乳製品に含まれるトランス脂肪酸に関す
高尾　啓	る研究
惣川友紀子	エミューの肉質に関する研究
林　瑞恵	
金澤　祐佳	食品副産物を用いたソーセージの開発に
澁澤　佳枝	関する研究

家畜衛生学研究室

家畜衛生学研究室は、室長の村上覚史教授、村田亮助教、また、大学院の山本孝史教授の下、大学院生四名、四年生三十五名、三年生三十三名で構成されています。

当研究室では、家畜別に、牛班、豚班、鶏班と実験動物班の四班に分かれ、日々の動物たちの飼育を通して各動物との接し方や育て方を学んでいます。

調査の研究としては、「農場から食卓まで」に関わる衛生を対象に、腸管内細菌の生体内移行による臓器汚染、人獣共通感染症として重要な豚のレンサ球菌やブドウ球菌、各種消毒薬の効果とその有効利用、カビの毒素、細菌の薬剤耐性、新菌種の登録や病原性などを院生、学部生と共に進めています。

主な行事として、新入生歓迎会、研修旅行、収穫祭（文化学術展、模擬店）、餅つき、慰霊祭、その他に定例会、納会等があります。これらの行事を通して各員は団結を深め、各々が目的意識を持って有意義な研究室活動を行っています。

なお、平成二十三年度の卒業論文の題目は次の通りです。

氏名	卒業論文題目	指導教員
青野理沙子	断餌、断水および輸送ストレスを加えたブロイラーにおける *Salmonella* Infantis の体内動態	村上
石川絵美子	長野県の牧場における子牛下痢症の原因の解明	村田
石川　博基	クロゴキブリの体表における病原細菌保有調査	村田
今給黎亮佑	鉱物系床散布剤エスカリウの散布が床面の細菌に及ぼす影響	山本 村田
漆畑　優李	鉱物系床散布剤エスカリウの乳房炎防除効果について	山本 村田
太田　智宏	食鳥処理場搬入ブロイラーから分離されたサルモネラについて	村上
小野塚未来	大規模農場における子牛の下痢症の原因追究	村田
片岡　悟	クロゴキブリの体内における病原細菌保有調査	村田

金田　明奈　初生から出荷日齢における *Salmonella* Infantis の排菌と体内動態　村上

金田　永美　薬剤による真菌の抵抗性変化　村上・高鳥

河合　桂　*Mycoplasma equirhinis* はヒツジ口腔内に常在するのか？　山本

木村　有希　イヌにおける人獣共通感染症起因菌保有調査　村田

小泉　彩乃　ブロイラー雛における *Salmonella* Infantis 2株の感染実験　村上

小林　美紀　豚の成長に伴う糞便由来大腸菌O群血清型の動態　山本・村上

小柳　佑太　踏み込み消毒槽の消毒剤に及ぼす有機物及び温度の影響　山本

坂井　友紀　豚における *Streptococcus suis* 保有調査と病原遺伝子の検出　村田

佐藤　暢太　マウスにおける *Arcanobacterium abortisuis* の病原性解明　村田・村上

篠田　幸平　ホロホロチョウにおけるニューカッスル病ワクチン投与方法の検討　村田

須藤　杏佳　富士農場における採卵鶏のサルモネラ実態調査　山本

関　美樹子　噴霧消毒薬の効果に及ぼす有機物と環境温度の影響　山本

関向　華子　保存料の抗カビ性評価　村上・高鳥

永澤　彩音　イヌにおける *Staphylococcus aureus* の保有調査　村田

仲野　史郎　パルスフィールドゲル電気泳動を用いた *Salmonella* Infantis の分子疫学的解析　村上・村田

羽生　芽　飼養形態が肥育豚の健康に与える影響について　村上

坂野　菜穂　富士農場におけるホロホロチョウのサルモネラ実態調査　山本

平田　那苗　*Arcanobacterium abortisuis* 感染動物における病理学的特徴　村田・村上

福田　庄司　一酪農場における乳汁中の細菌調査および環境衛生対策の検討　村田

星指　洋平　*Actinobacillus pleuropneumoniae* のチアンフェニコールに対する *in vitro* 耐性値上昇試験　山本

望月　優　畜舎環境における吸血性節足動物の Arbovirus 保有調査　村田

本山　浩太　カビの胞子・菌糸継代による集落変化　村上・高鳥

米山　友樹　ディッピング剤の効果に及ぼす有機物および温度の影響　山本

渡辺　淳　豚における *Arcanobacterium abortisuis* の病原性と疫学調査　村田・村上

朝比奈里美　富士農場における生乳細菌保有調査　村上・野口

竹之内眞希　畜舎環境における吸血性節足動物の分布調査　村田

畜産マネジメント研究室

畜産マネジメント研究室は小栗克之教授、信岡誠治准教授のご指導の下、平成二三年度は四年生十八名、三年生二十二名の態勢で研究室活動をしています。主に畜産経営や流通を専門とし、日本の畜産農家が抱える問題を中心として、流通・販売・消費などの諸過程と関連付けながら課題解決向けて実習や輪読、研修などを通して解決策を見出すべく活動しています。とくに、当研究室には畜産農家の後継者が多いことから、後継者の養成に対しは尽力しています。

研究室の研修旅行は、福島県西郷村にある家畜改良センターでの研修と視察、栃木県那須町の南ヶ丘牧場や茨城県常陸大宮市の瑞穂農場を訪れ、畜産の現場を視察するとともに、経営者の話を聞いて東京電力福島第一原子力発電所による放射性セシウム汚染への対応策、飼料価格へ高騰に対する対応策などを勉強しました。また、畜産フードフェアや東京食肉市場での現地研修会にも参加して見聞を広めています。

卒論研究では研究室活動の一環として、東京農大厚木農場棚沢水田において四十アールの水田を利用し飼料用米の栽培を行い、低コスト栽培法の開発とその生産物（籾とワラ）を利用した畜産物やエネルギーの生産にも取り組んでいます。これにより、飼料自給率の向上や海外依存型の畜産経営からの脱却を目指しています。これらは農学科や世田谷キャンパスの関係研究室、さらには農研機構や神奈川県畜産技術所などとの共同研究で行っています。

平成二十三年度の卒業論文題目は以下のとおりです。

氏名	卒業論文題目	
安樂紗耶佳	セシウム汚染された水田土壌の浄化対策の検討について―土壌の溶液中におけるセシウムの挙動について―	小栗 信岡 指導教員
大河原宏記	固体発酵法による稲（ホールクロップ）からのエタノール製造の低コスト化	小栗 信岡
菊地　儀貴	震災、福島原発問題による牛肉価格への影響	小栗 信岡
岸本　翔	競走馬需要が日本の軽種馬産業に及ぼす影響	小栗 信岡
渋谷　武洋	固体発酵法による稲ワラからのエタノール製造と低コスト化	小栗 信岡
高橋　正巳	低フィチン酸含量米給与が鶏糞に及ぼす影響―鶏糞中におけるリンの削減効果―	小栗 信岡
瀧沢　駿介	セシウム汚染土壌の浄化対策とコスト計算―土壌に残留するセシウム量について―	小栗 信岡
武井　紅葉	セシウム汚染水田土壌の浄化対策の検討―稲のセシウム吸収量について―	小栗 信岡
豊下　大輔	白神酵母による発酵飼料給与と経済性	小栗 信岡
鳥飼あゆみ	房総地鶏への飼料米の利用と経済性	小栗 信岡
長谷川拓巳	和牛肥育経営から一貫経営への移行資金―５００頭規模の肥育経営を事例に―	小栗 信岡
平林　啓太	飼料米「モミロマン」での堆肥稲作の土壌変化について	小栗 信岡
宗京　明里	全粒粉米粉の利用方法について―食用として―	小栗 信岡
守谷　高充	直播栽培の経済性と収量性について―催芽法の差異が「タカナリ」の生育に及ぼす影響―	小栗 信岡
矢野文太郎	種牛の相違が子牛価格形成に与える影響―大分県家畜市場を事例として―	小栗 信岡
山嵜　健矢	アメリカの牛肉生産・流通	小栗 信岡
山田　真	直播栽培の経済性と収量性について―催芽法の差異が「タカナリ」の収量に及ぼす影響―	小栗 信岡
山田　健裕	畜産経営における飼料構造の変化とその要因	小栗 信岡

ふじみの寄稿原稿（教員）

退職にあたって

畜産マネジメント研究室
小栗　克之

5年間の在職にすぎませんでしたが、皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。若干の思い出（驚かされたこと）と畜友会の皆様へのエールを書いて、お礼にかえさせて頂きます。

5年前、私は岐阜大学を定年退職し、こちらへは嘱託教授としてきました。ちょうど畜産マネジメント研究室が発足した年です。その1年前に信岡先生が当研究室に専任准教授として着任し、研究室運営の準備体制づくりをしていました。そこへ第1回生となる3年生と私が入ってきたわけです。

最初に驚いたことは、畜産マネジメント研究室の実験実習時間に信岡先生の陣頭指揮のもと、飼料米の田植え作業を行ったことです。これは想定外のことでした。濃厚飼料の自給体制を日本の畜産経営の中にもつくっていこうとする信岡先生の熱い思いが、そこにはありました。

また、鶏や羊等を当研究室で飼うことになったときも、第1回生や私は驚きました。ここは家畜飼養研究室ではなかったはずだと。しかし、その後、学生も飼料米を鶏や羊、豚等々に給与して、肉質や卵の成分、味等々へどのような影響があるのかなどに興味を示し、それらを卒論に取り込む学生がふえてきました。私は技術的な研究には素養がないため、もっぱら信岡先生にその方面の研究指導はまかせ、畜産の経営経済的問題に関する面を担当することにしました。

経営経済的な研究方法は、実験ではなく、調査が主体です。調査には旅費がかかります。しかし、学生には調査旅費を大学側から支出することはできません。それにもかかわらず卒論の調査研究に取り組む学生の姿勢に驚きました。アルバイトで調査旅費を工面し、北海道や九州、さらにはモンゴルやヨーロッパまで調査に行って卒論をまとめる学生が、多々いたからです。前職の岐阜大学の学生にはまったく見られない現象でした。そこでは日帰り圏内で調査をして、こぢんまりと卒論をまとめるというスタイルがほとんどだったから。東京農大生の逞しさ、大きさを感じた次第です。その違いはどこからくるのだろうかと。やはり、長年培った校風なのかもしれません。

これからの畜産学科の学生のみなさんもそのようなエネルギーを、伝統ある農大や畜友会、収穫祭等で養い、卒業後は社会のあらゆる分野でその力を存分に発揮されることを期待しています。

変遷する言葉

家畜生理学研究室
吉田　豊

「ふじみの」に寄稿する機会を頂いた。そこで、以前所属する研究室々報に以前寄稿した文章に多少加筆し、それを掲載して頂くことにした。

いまや、女性の社会進出が目覚しい。女性のエネルギッシュな行動力は、物静かになってしまった「草食系男子」たちのそれをはるかに上回っている感がある。そして、それを象徴するかのように、最近は男子顔負けの「闊達な女子」を主人公とする大河ドラマや連続ドラマなどが多いと思うのは、私が男ゆえの僻目だろうか

過日、新聞に興味あふれるコラムが載っていた。その内容の一部を拝借し紹介する。

「『おてんば』が今やほとんど死語となったのは、『おしとやか』が女の子へのほめ言葉として影が薄くなったのと表裏一体だろう。『御転婆』と書くが、実は『ontembaar』という『手におえない』を意味するオランダ語由来といわれる。『日本国語大辞典』によると、一方で『従順でない』ことを示す『てんば』という上方言葉を語源と見る人もいる。それが江戸に入った際に、オランダ語の影響も受けて今のような意味と語形になったという説もあるようだ。」

（毎日新聞　朝刊２０１１，２，２余禄から）

日常、何気なく使っている「パン」、「ボタン」、「カルタ」、「タバコ」、「テンプラ」、「トタン」そして「金平糖」などの語形が、ポルトガル語やオランダ語から伝承されたことは承知していたが、「おてんば」の語形も同様であると知り、改めて語意の移りゆく様に驚きを感じた。

まさに「言葉」は、その時々の世風を反映し、進化し続ける形なき「変遷する文化的生き物」である。

そこで、近年キャンパスで耳にすることの多い学生たちの言葉のいくつかを紹介してみる。

「全然いい」、「‥っていうか」、「‥的には」、「‥じゃあ　ないですかあ」などの奇怪な表現に加え、

「このふいんき少しやばいんじゃないですか？」

「この状況ではやむおえないね。」

「この肉すごいおいしい。」「この料理普通においしい。」

「事後処理をおざなりにする。」

「それでは歌わさせていただきます。」

「すいません。お先に失礼します。」

『…これを読んでいるあなたは、これらの表現のどこがおかしいか判りますか？…』

そして、交わされる挨拶は時刻に関係なくいつでも「おはよう」、数える単位は何でも「個」、分ってもわからなくても返ってくる言葉は全て「ハイ」。私の思いすごしなら良いのだが、『これでいいのだろうか』、『このままでいいのだろうか』と不安になってしまう。

しかし、私には不可解に聴こえるこれらの言葉も、若者たちにはごく普通の日常会話として通じている。これこそがまさに「変遷する言葉」なのだろうか。世代間格差、今風に表現するならば「ジェネレーションギャップ」を感じざるをえない。

10年間の教員生活を振り返って

家畜育種学研究室教授
花田博文

昨年の口蹄疫の発生、そして今年3月の東日本大震災、放射能汚染被害。今また、環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）問題がテレビや新聞紙上を賑わせている。我が国の農業、とりわけ畜産は、非常に厳しい情勢下にある。

私は、平成14年4月に東京農業大学の仲間に加えて頂いた。それまでは農林水産省の研究機関に勤務していた。社会人生活の大切な最後の10年を農大で過ごさせて頂いたことになる。試験研究機関での時間も本当に楽しく、充実したものであったが、農大ではまたひと味違った楽しさ、喜びを体験させて頂いた。先生方、学生の皆さんに感謝、感謝である。

つい先日、本誌の編集委員である2年生の宇畑泰子さんから、「先生、教員生活を終えるにあたって、ひと言」と原稿依頼を受けた。ちょうど10年前、現在、恩賜上野動物園に勤務している石井淳子さん（家畜繁殖学研究室出身）から「ふじみの」への執筆依頼を受けたのを思い出した。「先生、農大の一員になられたので、ひと言」。突然の依頼であった。確か、「1年生教員の独り言」と題して、自己紹介（原産地：福岡県、育成地：宮崎県等）と併せて、農大に来て日々感じていたことを記したように記憶している。ただ、今でもはっきりと覚えていることがひとつある。原稿の執筆依頼の際に頂いた一冊（ふじみの）の中で、生物生産学科の三浦先生が退職にあたり述べられていた教えである。「学生は一人ひとりが高い潜在能力と向上心を持っている。教員は、その伸びる力を刺激し助けるに過ぎない。単に教え育てるのではなく、助け育てることが大切である」。このような内容のことを述べられていた。私自身、10年間を振り返って教員として合格点を頂けるのかどうか。そのことについては全く自信がない。でも、卒業後、多くの学生が近況報告に訪れてくれているので、自己評価は、それをもって一応合格「優ではなく可」とさせて頂きたい。

私は、学生時代から、牛と豚、大好き人間であった。それに、「遺伝」に大変興味があった。経済動物である家畜の場合、遺伝的能力が高いものだけが選ばれ、それ以外は淘汰される運命にあることは学生の皆さん知っての通りである。ただ、いくら優れた能力を持った個体にも「寿命」がある。それで、自分の持っている優れた能力（形質）を子供、そして孫に伝えようとする。「生命の設計図」である遺伝子、さらにはその担い手である染色体は、雄（男性）と雌（女性）とのすばらしい出会い、すなわち「受精（結婚）」と言う過程を通して後代に受け継がれる。牛の場合には、人工授精が広く普及しており、育種改良に大きく貢献している。しかし、生命の設計図の受け渡しの際に誤りを生じたり、種雄牛自身が遺伝的不良形質を保有している場合には、生産性、特に繁殖性に大きな影響を及ぼしかねない。私は、後者に関心があり、国研では、長年、牛における染色体異常と生産性に関する研究に携わってきた。ところが、私が農大に着任する数年前、1996年7月に、衝撃的なニュースがイギリスから届けられた。世界で初めての体細胞クローン技術によって作出された動物、いわゆる「ドリー」の誕生である。それ以来、我が国でも体細胞クローン牛や豚が多数作出されてきている。しかし、作出効率が低く、牛の場合には過胎児の発生率が高い。体細胞クローン技術の安全性（個体としての健全性、食品としての安全性、さらには生物としての遺伝的正常性）については、様々な観点から精力的に研究が進められてきている。私も、農大でのこの10年間、国公立の研究機関の協力を頂きながら、細胞（染色体）レベルでの研究を分担させて頂いた。研究環境や時間的な制約はあったが、院生、学部生と過ごした時間は、今、教員生活を振り返って最も有意義で楽しい時間であったような気がしている。残念ながら、体細胞クローン技術はまだ実用化には至っていない。でも、体細胞クローン個体は、生命の神秘や遺伝の面白さを知るための大変貴重な研究材料であり、教育材料ではないかと思う。学生の皆さん、どう思いますか。「受精」と言う過程を踏まずに作られた個体ですよ。

東京農業大学は、実学主義を教育理念としている。ただ、本学の場合、国公立大学に比べると学生数が多い。卒業後の進路先ひとつを見ても、会社員や教員、公務員、それに畜産の後継者と多様である。大学院に進み、試験研究機関への就職を目指している学生もいる。大変難しいことではあるが、教員が学生と一緒に過ごせる時間をもっと持てればと願う。これが実学教育の出発点であり、実学教育において最も大切なことではないかと思う。学生数の多さをうまく活用し、それを優秀な人材の宝庫と呼べるものにするためにも。

還暦を過ぎた私には、学生の皆さんの若さが羨ましい。若いと言うことは、何事にも挑戦する機会を与えられているということである。一度しかない学生生活である。学生の皆さん、研究室活動、課外活動、何事にも積極的に取り組み、悔いのない学生生活を送って下さい。そして、農大、畜産学科の新たな伝統を築いて下さい。伝統とは、単に守り続けるものではなく、皆さんが新たに築いていくものだと思います。

最後に、東京農業大学、畜産学科の一層の発展を願って、退任にあたっての言葉とさせて頂きます。



大好きな牛さんともお別れ



今年度の収穫祭に訪れた卒業生と共に



退職に際して

富士農場

佐藤光夫

本学に奉職してから、早くも四十年七ヵ月が経過し、ようやく退職することとなりました。振り返ってみますと、非常に長い時間であったような、あっという間に過ぎた短い時間であったような、何とも言えないような不思議な気分であります。ただ、自分の半生を捧げた職場としては、十二分に充実した時間を過ごせたと思います。

数多い想い出や経験を少しだけ振り返ってみたいと思います。

私が畜産学科の三年生の時でした。門司先生が収穫祭の委員長として君臨しておりまして、文展がどうしても現場より離れた方向へ偏りがちなので、泥臭さを表現するために農場から家畜を連れてきて展示と触れあいを兼ねた家畜苑を文展の特別企画としてやってくれというものでした。私としても趣旨は理解できましたが、コブシひとつでは何も出来ないので、人的には練習生出身者を中心にかなりのスタッフを集めました。予算が無いと言うことで畜友会に泣きつきまして、文展本部と畜友会からの補助金で賄うことになりました。次は農場（当時は厚木農場畜産部）から家畜を借用し運搬する計画で農場に出向き、当時の副場長に頼みに言ったところ、こっぴどく叱られまして、家畜の死亡や事故があった場合には誰が責任を取るのかというところでもめました。大型トラクターも世田谷キャンパスに運んで、来客を乗せようという企画はあっという間に消え去りました。家畜苑に関しては粘り強く頼んだ結果、何とか乳牛・数種類の豚・鶏などを借用し、自営農家の学生が自宅のトラックを運転して家畜を運搬するという企画になりましたが、どの場所で家畜苑を展示するかという問題で、図書館前の芝生の上に囲いを作って三日間展示をするという案は、造園学科の猛烈な反対を受け、これを説得するのに何日間か費やしたことでした。結果は芝生の上にイナワラを敷料にして家畜を飼育し、終わった時点で現状復帰するという約束で家畜苑を開催することが出来ました。この家畜苑が昭和四四年のことですから、二〇一一年で四二年が経過していることになります。家畜苑が現在も続いていることが不思議なくらいですが、この間には諸々の事情で開催できなかったことや防疫上の問題で制約を受けることがありましたが、私が奉職し農場勤務になってからは、逆に学生さんから頼まれる立場になったので、学生時代のことを考えると断ることは出来ません。何とか良い形で収穫祭の家畜苑が継続されることが望まれます。

私が奉職中にたどった足取りですが、昭和四六年三月に畜産学科を卒業しまして、五ヵ月間厚木農場で研修生、九月になってやっと助手の辞令を交付され、富士農場（当時は富士分場）に赴任しました。四年間は肉体労働を中心に勤め、昭和五〇年に厚木農場に異動、その時に郡山さんが練習生でした。厚木農場に九年間在籍した後に新農場建設要員として昭和五九年四月に厚木の乳牛をトラックに積んで郡山さんと共に富士に異動したわけであります。当時の富士農場は乳牛の去勢牛肥育と乳牛の育成牛飼育が中心であり、黒毛和種は繁殖牛が三頭だけでした。もっと肉牛部門を充実させなければならないと言うことで、静岡県経済連に勤めていた芹澤章徳（昭和五四年衛生研卒）さんに依頼して繁殖基礎牛を二頭導入しました。このうちの一頭（名号：いなもん）が大活躍をしまして、十一産した内の七頭が雌でありました。この子孫達が農大の基礎牛となって、現在に繋がっているわけであります。日本における国公私立大学の付属農場における牛群は、おおよそ近隣の農家から高い評価を受けることは聞いたことが無いのが現状ですが、郡山さんと共に約二〇年の歳月をかけて繁殖牛の改良に努め、静岡県内における育種価が向上したことから、本学の卒業生たちや近隣の肉牛農家より農大の繁殖牛を販売して欲しいとの要望が多く、高い評価を受けている証拠であると、感慨深く考えております。既に退職されている鈴木伸一先生は従前から、大学農場であるからこそ良い家畜を生産し、良い家畜を用いて教育や研究をしなくてはならないと述べておられましたが、まったくその通りだと思います。大学の事務系上層部の中には、実習のあるときだけ家畜を購入し、実習が終わったらその家畜を販売してしまえば、管理要員や予算が少なくて済むと考えている人も居ります。費用対効果を口にする人も居ります。しかしながら、本学が掲げる実学教育とはそんなものではないと思うのであります。農家の方々から高い評価を受けることによって、自分たちの子供を農大で学ばせたいと思うのではないでしょうか？

その様な意味で、大学農場では常に良い家畜を生産し、維持されている実学農場を目指して、頑張り続けて欲しいと願うものであります。

以上

集う学友

あーーーっという間に駆け抜けた日々！おれの4年間を聞いてくれ

畜産学科
4年　清水　涼祐

この4年間を振り返ると、ドヤ顔で本当に人に恵まれた4年間だったと言える。そしてビックリするくらい楽しかった。

群馬県の山の中から、期待と不安をいっぱい抱えて一人暮らしを始めたのが4年前。入学式の数日前に、同じ高校だった友達と入学式の日を学生サービス課に聞きに行ったことを今でも覚えている。そこから僕の農大生活が始まった。最初は友達ができるか不安だったが、そんな不安は無駄になり自然と友達に恵まれた。そこからは友達の友達と友達になったりと、どんどん繋がりができていき、そうなると学校に行くのが楽しくてしかたがなくなった。畜産学科は本当に面白い奴ばかり！部活は勇気を出して軽音楽部に入部した。人生で初めてバンドを組み活動した。ライブを含めビックリするくらい楽しかった。3年生になり研究室が忙しくなりほとんど活動できなかったのは少し残念だったが、勝手にフェスの気分で挑んだ4年生の収穫祭での野外ライブは特に忘れられない。見に来てくれた方ありがとうございました！1―2年生の時はライブやバイトをしたり、本当に朝から晩まで年中無休で友達といてくだらないことに一生懸命だった。色んな場所でみんなでテスト勉強をしたことも懐かしい。

3年生になり家畜繁殖学研究室に入った。新たに先輩や友達もできたが、自分の卒論が始まると生活は一変した。日々実験に追われ、雨にも負けず風にも負けず、土日祝日関係なく本当に毎日研究室に通った。こればっかりは自分を褒めてあげたい。お疲れ自分！しかし自分がめげずに納得するまでできたのは、本当にお世話になり感謝してもしきれないある先輩の存在や、実験班の仲間に恵まれたからだということは間違いない。他にも繁研では幹部の1人として仕事をさせてもらった。この経験は本当に自分を成長させてくれたと思う。4年生になると授業もなくなり、他の研究室の友達と会う回数がさらに減り寂しかったが、3年生が入ってきて先輩になった。就活やイベントごとなど本当にたくさんの出来事があり思い出がある。

4年間ビックリするくらい素晴らしかった。今こうして素晴らしかったと思えるのだから間違いない。4年間ビックリするくらい楽しかった。ビックリするくらい充実していた。ビックリするくらい笑った。もはやビックリした。数えきれないほどの経験をし、数えきれないほどのかけがえのない仲間に出会った。辛いこと、苦しいこと、悔しいこともあったが、その100倍以上の感動や笑い、楽しい思い出を色んな人から貰った。関ってくれた全ての人に本当に感謝。ありがとうございました。

農大での日々を振り返って

畜産学科
3年　高野　明日香

この原稿を依頼されて、今までの大学生活を振り返ってみた。一言でいうとにかく多忙な2年半だったなぁ、という気分だ。

私は入学してから総務部に所属し、新入生歓迎企画、収穫祭、役員交代式といった行事の運営に携わった。総務部としての活動と並行して授業もフルでとっていたため少々後悔したこともあった。もちろん履修を取り消すわけにもいかず、かといって評価を下げたくもなかったため、若干の睡眠を補給しながらもなんとか授業に出席していた。同時にアルバイトでは度重なる失敗に落ち込み、上司に叱られる始末。そのかわり気遣いや大人の常識というものをわずかではあるが理解できたという意味では、やってみてよかったと思っている。

2年次になり、後輩もできて、責任感が芽生えるようになった。人に物事を教えるというのは難しいと感じた時期でもあった。とにかく授業と部活の両立が大変な時期だったことは確かだ。だが、そんな中で夏休み中に海外へ単身旅行にも行った。祖母の家に泊まり、親戚が案内してくれたが、いとこ達にも会うことができ、なかなか一人で国内すら旅行をしたことがなかったので貴重な体験だった。

3年になると行事の長や実行委員会の本部の長にと、なにかとリーダーを任される機会も増え、総務部としての活動のウェイトは体力や労力から知力や精神力に移行。こちらの方が正直きつかった。そして晴れて研究室にも配属され、今度は実験とレポートの嵐にもまれる日々を過ごした。しかし、実験や飲み会を通して室員とも親しくなり、とても楽しく有意義な時間であった。

収穫祭では実行委員会としての活動もあったが、研究室員としてハムやソーセージの加工にもできるだけ参加した。室員の仲間が時間を惜しまず作業を行っている中、なかなか手伝いに行けない、申し訳ない気持ちもあったが、そんな時には決まって「総務としての仕事をその分頑張ればいい！」と言ってくれ、胸がいっぱいになった。時には自身の能力に自信がなくなり、落ち込むこともあったが、一緒に頑張っている役員やいつも授業を一緒に受けている友人、研究室の仲間の助けや励ましもあり、なんとか収穫祭を終えることもできた。

収穫祭が終わると今度は先輩の卒業論文の実験手伝いや就職活動が本格化してきた。

今は研究室での活動と就活にいそしむ日々だが、多くの時間を過ごした仲間はかけがえのない宝物だと思う。あと1年ほどしかない大学生活を、今後は貴重な時間と思って大事に過ごしていこうと思う。

充実した1年間

畜産学科
2年　清瀧　健太

農大に入学してから2年が経ちました。2年生になったこの1年間は、毎日が多忙で充実しており、懸命に過ごしていたらあっという間に月日が過ぎていった、という感覚です。

2年生になってやっと一人暮らしにもすっかり慣れ、大学の授業にも雰囲気にも慣れ、友達もそれなりに多くでき、これで生活にも余裕ができる、と思っていたが、大きな間違いでした。授業はほぼ毎日朝からで、内容も徐々に難しくなりました。そして最大の難関は、前期の畜産学実験実習。実験は多くの時間を要し、なおかつ成功するまで帰れません。我々は早く帰りたいという欲望からかミスを連発しました。（教授の方々、本当にごめんなさい）しかしながら、得るものも多く、専門的なこと、興味深いことを学び得ることができるのは勿論のこと、実験を共に乗り越えた友達、そして何事も諦めない心を得ることができました。毎日がとても大変なのですが、日々楽しく過ごしています。

部活動は世田谷の農友会卓球部に所属し、日々練習に励んでいます。ここで世田谷キャンパスの友達もでき、見聞が広がりました。練習に参加するためにわざわざ世田谷キャンパスに行くために毎日練習できるわけではなく、通うこと自体が大きな負担なのですが、それでも卓球がしたいと思いました。どのスポーツにも共通するのかもしれませんが、勝利は最後まで諦めずに努力した者に転がりこむものだと自分は思います。諦めず努力したことで得ることの勝利の喜びを教えてくれた卓球を辞めたくなかったからこそ、いまでも懸命に練習に励んでいます。練習は辛くて非常に疲れますが、部活動では多くの事を得ることができ、これが学生生活をより充実したものにしています。

収穫祭は世田谷キャンパスの収穫祭に参加し、部活で野菜と米と花を売っていました。朝4時からハチミツ購入のために列を作り、また安い食材を求め眼の色を変えて押し寄せて来る世田谷セレブには衝撃を受けました。店では頑張って声を出し続けて懸命に客引きをした結果、過去最多の売上となりました。その後の体育祭では用具を出す雑用を担当していました。競技・応援合戦での異様な盛り上がりや、部活動対抗リレーでの後輩たちのコスプレなど、脇からではありますが体育祭を楽しむことができました。

学業・部活動・バイトなどやることだらけで、非常に充実した1年間でした。来年からは研究室がはじまります。また就職活動もあり、より忙しくなることが予想されます。しかし、どれかを諦めてしまうのは勿体ないと思います。欲張りなのかもしれませんが、全てにおいて懸命に取り組むことで、今後の大学生活をより充実したものにしたいと自分は思っています。みなさんも諦めずに懸命に取り組んで、大学生活をより充実したものにしませんか？

農大一年の思い出

畜産学科
1年　甲斐　瞳

東京農大に入学して早くも一年が経とうとしています。私は農業高校出身で、そこで経験した畜産のことをより深く知りたいと思い農大の畜産学科に入学しました。

入学したばかりのときは勉強や友人が出来るかなど不安でいっぱいでした。しかし、今となっては授業や実習、サークル活動を通して、たくさんの友人や先輩方と出会うことができました。講義は難しいと思うこともありますが、友達とお互いに助け合いながら毎日楽しい大学生活を送っています。

前期で受けた講義で知識を身に付け、後期の実験実習で実際に行い観察することができ、より高度な専門知識や技術を学ぶことが出来ました。今まで学んだことをより深く理解し、たくさんの新しい知識も身につけることが出来ました。

夏の畜産実習では、教科書でしか見たことない品種の家畜を実際に観察することや、健康確認、集卵、搾乳など様々な日常管理や特別管理を行いました。農場に四日間、宿泊しての実習だったので友達と、朝から夕方まで一日中作業を行い、ご飯や生活を共にしたことはこの一年間で一番の思い出になったと思います。

サークルはファーミング同好会に所属しており、近隣の農家や畜産農家のお手伝いや、作業体験をさせていただく活動をしています。サークルの作業や合宿で他学科の友人や先輩方、農家の方とたくさんの人と交流する機会が増えました。また、農家の畑をお借りして、夏にじゃがいもの種芋を自分達で植え栽培し、農大の一大イベントである収穫祭の模擬店でじゃがバターとして販売をしました。自分達で育て、作ったものをたくさんの人に味わっていただくことができ、「おいしかった」と何度も好評を頂きました。完売したときは本当に嬉しかったです。収穫祭の準備のお手伝いにも参加をしました。手作りで大きな看板や学科の神輿など作成していきました。こうして学生達が力を合わせて一つのものを作っていく雰囲気がとても良く、先輩方に様々な面で助けていただきながら楽しく過ごすことが出来ました。

私もいよいよ二年生になります。二年生からは、より専門的な分野の授業や三年生から所属する研究室の決定があります。この大学一年で受けた授業や実習を活かし、たくさんの経験を積んでいけるようこれまで以上に努力をしていきます。そしてこれからは私自身が先輩として先輩方のように活躍できるよう積極的に行動し、楽しいサークル活動や行事等で力になれるよう、頑張っていきます。

平成23年度畜友会活動報告

平成23年6月1日～平成24年3月31日

平成23年

5月25日
～27日　厚木キャンパス春季スポーツ大会参加

6月9日　新入生歓迎会（於　レストランけやき）

6月23日　平成23年度畜友会定期総会
平成23年度畜友会・畜産学科統一本部の立ち上げ
（於　トリニティーホール）

10月8日　厚木パレード（於　厚木一番街）

10月17日　第12回厚木キャンパス収穫祭　及び
第120回体育祭畜産学科統一本部開き
（於　レストランけやき）

10月28日　第12回厚木キャンパス収穫祭　前夜祭　参加

10月29日
～30日　第12回厚木キャンパス収穫祭　参加
（家畜苑、研究棟アート、特別企画、宣伝隊）

10月31日　第120回体育祭　参加（於　世田谷キャンパス）

11月28日　第12回厚木キャンパス収穫祭　及び
第120回体育祭畜産学科統一本部慰労会（於　レストランけやき）

平成24年度

3月12日　畜友会誌「ふじみの」48号発行

3月21日　卒業祝賀会・卒業記念品贈呈（於　厚木キャンパス）

平成22年度 畜友会 収支決算報告

収支決算書　平成22年6月1日～平成23年5月31日

Ⅰ．一般会計

収入の部　（単価：円）

科目		決算額	予算額	差異	備考
会費	新入生（H23年）	1,250,000[1]	2,100,000	850,000	
	編入生（H23年）	15,000[2]	50,000	35,000	
	過度年分	355,000[3]	2,010,000	1,655,000	
雑収入		78	0	78	普通預金利息
寄付		500,000	－	500,000	畜産学科創設60周年記念事業委員会
前期一般会計繰越金		1,918,391	1,918,391	0	
H22年度収穫祭特別会計からの繰入金		407,945	0	△407,945	収穫祭特別会計収支差額（C－D）
合計（A）		4,446,414	6,078,391	2,632,133	

1）新入生：10,000円×125名
2）編入生：5,000円×3名
3）在校生：10,000円×35名，7,500円×0名，5,000円×1名

支出の部　（単価：円）

科目	決算額	予算額	差異	備考
①収穫祭特別会計費	1,007,338	700,000	△307,338	
②ふじみの印刷費	301,980	430,000	128,020	
③卒業祝賀会費	0	180,000	180,000	祝賀会中止の為
④卒業記念品費	296,940	300,000	3,060	
⑤新入生歓迎会費	0	150,000	150,000	開催日が延期された為
⑥消耗品費	0	30,000	30,000	
⑦特別講演会費	-	-	-	
⑧雑費	630	50,000	49,370	
⑨予備費	304,840[4]	4,238,391	3,933,551	
合計（B）	1,911,728	6,078,391	4,166,663	
収支差額：（A）－（B）	2,534,686			

4）諸活動時着用法被が不足したため購入（304,840円）

平成22年度 収穫祭特別会計収支決算報告

平成22年6月1日～平成23年5月31日

Ⅱ. 収穫祭特別会計

収入の部　　(単価：円)

科目	畜友会援助費			
	決算額	予算額	差額	備考
一般会計からの繰入金	1,007,338	700,000	△307,338	一般会計支出より
雑収入	22	0	22	普通預金利息
前期繰越金	100	100	0	
合計（C）	1,007,460	700,100	307,360	

支出の部　　(単価：円)

科目	畜友会援助費			
	決算額	予算額	差額	備考
統一本部口座維持費	0	100	100	預金として残
統一本部	363,903	400,000	36,097	
特別企画	0	0	0	
体育祭	73,579	70,000	△3,579	
宣伝隊	20,000	50,000	30,000	
装飾	47,660	50,000	2,340	
家畜苑	93,601	100,000	6,399	
予備費	772	30,000	29,228	
合計（D）	599,515	700,000	100,485	
収支差額：（C）－（D）	407,945	0	△407,945	一般会計繰入金

上記の通り報告する。
平成23年6月22日

畜友会会長　鈴木敏郎 ㊞

監査報告書

畜友会会則第9章、29条及び30条の規定に基づいて平成23年6月22日に平成22年度業務及び会計監査を実施しました。

事業報告、通帳、出納帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

上記に相違ないことを認める。
平成23年6月22日

平成22年畜友会監査委員

高橋幸水
福田庄司
原ひろみ
郡山貴義

平成23年度畜友会予算（案）

収支予算書　平成23年6月1日～平成24年5月31日

Ⅰ. 一般会計予算（案）

収入の部

科目		H23年度	H22年度	差異	備考
会費	新入生（H24年）	2,270,000[1]	2,100,000	170,000	
	編入生（H24年）	35,000[2]	50,000	△15,000	
	過年度分（H23年）	1,705,000[3]	2,010,000	△305,000	
雑収入		0	0	0	
前期繰越金		2,534,686	1,918,391	616,295	
合計		6,544,686	6,078,391	466,295	

1）新入生：10,000円×227名
2）編入生：5,000円×7名
3）在校生：10,000円×170名
　　5,000円×1名

支出の部

科目	H23年度予算額	H22年度決算額	差異	備考
収穫祭特別会計費	700,000	700,000	0	
ふじみの印刷費	310,000	430,000	△120,000	
卒業祝賀会費	180,000	180,000	0	
卒業記念品費	227,000	300,000	△73,000	1,000円×227名
新入生歓迎会費	289,449[4]	150,000	139,449	
消耗品費	30,000	30,000	0	
特別講演会費	30,000	0	30,000	
雑費	50,000	50,000	0	
予備費	718,237	4,293,391	△3,575,154	
合計	2,534,686	6,133,391	△3,598,705	

4）平成23年6月9日に行った新入生歓迎会費139,449円を含んでいます。

平成23年度畜友会役員

平成23年6月1日～平成24年5月31日

役職（教員）	氏　名	研究室
会　長	鈴木敏郎	畜産物利用学研究室
副会長	桑山岳人	家畜繁殖学研究室
副会長	村上覚史	家畜衛生学研究室

・執行委員

委員長	3年	榊原啓太	畜産マネジメント研究室
副委員長		重　翔太	畜産マネジメント研究室
	2年	川添友誠	畜産マネジメント研究室　（予定）
会　計	3年	伊藤知里	家畜繁殖学研究室
	2年	林　未由	家畜生理学研究室　（予定）
企画・渉外	3年	川口純平	畜産マネジメント研究室
	2年	今井星良	家畜生理学研究室　（予定）
庶　務	3年	小林由音	家畜衛生学研究室
	2年	水主裕太	家畜飼養学研究室　（予定）
編　集	3年	竹内　薫	畜産物利用学研究室
	2年	宇畑泰子	家畜衛生学研究室　（予定）
監事（教員）		高橋幸水	家畜育種学研究室
		原　ひろみ	家畜生理学研究室
監事（学生）	3年	郡山貴義	家畜飼養学研究室
	2年	高崎淳史	畜産マネジメント研究室　（予定）

※学年は平成24年3月現在

平成23年度特別会計予算

平成23年6月1日～平成24年5月31日

Ⅱ．特別会計予算（案）

畜友会援助費

収入の部

科　目	H23年度	H22年度決算額	差　額
一般会計から繰入金	700,000	700,000	0
雑　収　入	0	0	0
前期繰越金	100	100	0
合　計（A）	700,100	700,100	0

支出の部

科　目	H23年度	H22年度	差　額
統一本部	400,000	400,000	0
特別企画	0	0	0
体育祭	70,000	70,000	0
宣伝隊	50,000	50,000	0
装　飾	50,000	50,000	0
家畜苑	100,000	100,000	0
予備費	30,000	30,000	0
合　計（B）	700,000	700,000	0
収支差額	100	100	0

農友会学科助成金

（単位：円）

収入の部

科　目	農友会厚木支部助成金		
	予算額	決算額	差　額
畜産学科助成金	1,720,000	1,720,000	0
雑費　預金利息	0	234	
合　計	1,720,000	1,720,234	234

支出の部

科　目	農友会厚木支部助成金		
	予算額	決算額	差　額
1学科助成金	686,000	620,653	65,347
事務費	20,000	35,499	△15,499
記録費	104,000	43,363	60,637
交通費	157,000	139,200	17,800
神輿代	145,000	133,918	11,082
パネル代	120,000	115,717	4,283
応援合戦・衣装代	140,000	152,956	△12,956
2学内装飾費	190,000	192,253	△2,253
3収穫祭体験企画費	844,000	688,323	155,677
鋼管リース代	180,000	127,798	52,202
運搬代	400,000	202,840	197,160
装飾代	264,000	357,685	△93,685
4返還金	0	219,005	△219,005
合　計	1,720,000	1,720,234	△234

第十二回厚木キャンパス収穫祭・第一二〇回体育祭事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第12回収穫祭での活動は例年と同じく、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動としては先生方と連絡を取り、畜産学科統一本部の各部門及び第11回厚木キャンパス収穫祭実行本部、同じ厚木にある農学科統一本部、バイオセラピー学科統一本部、また世田谷13学科統一本部と連携し、そして畜産学科統一本部をまとめて厚木キャンパスでの収穫祭、世田谷での体育祭を成功させるために2カ月間全力疾走しました。

本年度は震災の影響により、昨年とは全く違ったかたちの収穫祭、体育祭となりましたが、それでも一年生から三年生の総勢49名で力を合わせて成功させることができました。

来年度も、どんな困難にも負けることなく、一年生と二年生それに新一年生と一致団結し、今年の収穫祭・体育祭に負けないものをつくり上げられるよう頑張りたいと思います。



特別企画

特別企画とは屋外ステージで行う2週間の企画を作る、収穫祭の中でも3学科が一緒になって行う一番花形の部門である。

今年度の畜友会特別企画は、「相思相愛」「NBC」「コスプレコンテスト」「○×ゲーム」の四つを企画した。企画内容はもちろん、台本、背景をつくり、衣装を考えた。音響さんと念入りに打ち合わせをして本番を迎えた。収穫祭が近づくにつれて、近所の人やバイト先のお客さんに「収穫祭毎年たのしみにしているよ」「収穫祭行くから頑張ってね」ってたくさん声をかけていただいて、本当に嬉しかった。当日はほとんどステージの側にいて、先輩たちの考えた企画が盛り上がっていて、楽しくて、来年私もこんなステージを作りたいなぁって思った。子供向けの企画で、こどもたちがみんな笑顔でいて私も楽しくなり、自分が収穫祭にかかわれたことを、すごく誇りに思った。そして収穫祭に準備から全部関わり、収穫祭ができあがるまでにはたくさんの人が一生懸命働いているということと、本当に地域の人から愛されている行事だと実感した。これからも農大生はもちろん、大人から子供まで、みんなに愛される収穫祭を作っていけたらいいと思う。



宣伝隊

宣伝隊は、東京農業大学の収穫祭を知ってもらうために、ウチワ配りやビラ配布などの宣伝活動を行います。農大の「大根」と厚木をイメージした「鮎」の柄が入った白の浴衣に臙脂（えんじ）色の法被を羽織り、白足袋を履いた宣伝隊ならではの正装で宣伝活動を行っています。

8月は厚木で行われる鮎祭りのDANBEフェスティバルへの参加やジャズナイトフェスティバル、厚木農業味覚祭りでのウチワ配り、9月には店回り宣伝活動や各駅でビラを配る各駅宣伝活動を行いました。また、収穫祭間近の10月には厚木一番街を各学科神輿を担いで練り歩く最大の宣伝活動である厚木パレードの開催や世田谷キャンパスでの収穫祭パレードへも参加しました。

今年は世田谷キャンパス収穫祭が第120回を迎えたということで、世田谷キャンパス収穫祭パレードに厚木キャンパスから宣伝隊と3学科委員長が参加し、厚木パレードでは世田谷12学科委員長にも参加してもらいました。本祭当日の野菜の無料配布では2日間とも天気に恵まれ、用意したすべての野菜を配り終えることができました。

今年の来場者数は、目標としていた5万人には達することができませんでしたが、今年は東日本大震災が起きたこともあり、宣伝活動を通して農大生の元気を伝えることができたと思います。来年度は今年以上に新しい宣伝活動を取り入れ、より多くの方々に収穫祭を楽しんでもらえるように精進していきたいと思います。





神輿

神輿は、厚木一番街で催される「厚木パレード」における収穫祭の宣伝や本祭を盛り上げるため、夏休みがスタートしてから約二ヶ月間製作しました。

今年も去年に引き続き、本祭における厚木キャンパス内での一般投票と、世田谷キャンパスでの審査が行われました。

今年の畜産神輿の一番の見どころは、なんといっても牛、豚、鶏といった三大家畜がメリーゴーランドの如く回転するところでしょう。当初の予定では神輿の中の家畜たちは固定されたままの状態でしたが、厚木パレード後に急遽思い付き、勢いで回転台を製作してしまいました。我ら神輿隊が一丸となって知恵を絞りだし、モーターやバッテリーといった電気機器を駆使し、やっとの思いでスイッチ一つで回転させることができました。「動き」をつけた神輿は世田谷、厚木を含めこれまでに無い斬新な神輿となりました。これが本祭で来場者、特に子供や年配の方々の目を引き、厚木キャンパスでは第一位、世田谷キャンパスでは銀賞という輝かしい成績を収めることができました。

来年の神輿は、一目で畜産学科と分かる、神輿らしい神輿という伝統を残しつつも、自分たちのオリジナリティを取り入れて製作し、世田谷キャンパスでの金賞を狙いたいと思います。



体育祭

体育祭は収穫祭の最後の行事として、世田谷キャンパスに16学科が集まり行われます。大玉転がしや玉入れ、綱引き、リレーなど朝から多くの競技でどの学科もすごい盛り上がりを見せます。

その中でも体育祭の見所といえば、どの学科も何ヶ月も前から準備や練習を全員で積み重ねてきた応援合戦があります。畜産学科は、1ヶ月間ほぼ毎日全体練習をして、夜通しで個人練習もしてきました。今年度の畜産学科の体育祭のテーマは「侍」でした。侍らしく衣装は黒の着物をイメージし、背中には学科のシンボルである牛を描き、大道具では旗を掲げました。そしてカッコ良く、力強い踊りで観客の皆さんを魅了することが出来たと思います。畜産全員で作り上げた「侍」は迫力があり、素晴らしい1つの作品になりました。応援合戦は惜しくも4位と、表彰台に上れなかったことは本当に悔しいですが当日は全員が出せる力を全て出し切った、最高の踊りが出来ました。

競技の部が3位、総合の部で5位と、目標であった優勝にはとどきませんでしたが、今年度畜産学科の収穫祭の集大成として最高の盛り上がりだったのではないでしょうか。

ご協力いただいた先生方、OB・OGの皆様や畜産学科の方々、本当にありがとうございました。

来年度の畜産はただ表彰台に上りたいという甘い考えはありません。全てで1位を取り、優勝旗とトロフィーを持って帰ってきます。楽しみにしていてください。



櫓

櫓装飾とは各学科がそれぞれのテーマに沿って絵を大きなパネルに描き、闘う戦士を奮起させることにより体育祭を影ながら応援し更には得点も入る一種の体育祭の競技でもあります。

櫓装飾の作業としては夏休みから基礎となる垂木、べにや板の組み立てを始めデザインの下書きをし、様々なペンキを駆使し色を塗り、さらに色を塗り、また更に色を塗り、寝ても色を塗り、起きても色を塗るという生活を約二か月送りました。

その結果できた今年の櫓装飾は、体育祭のテーマである「侍」要素を取り入れ畜産学科の侍が勇ましく闘う姿を闘牛に例えデザインのメインとしました。また両サイドに鳥と猪を描いた事により主役を引き立てることができたと思います。

今年の順位は櫓装飾の部第八位というとても残念な結果に終わってしまい、私たちに残されたものは輝かしい結果ではなく「悔しさ」になってしまいました。

しかし第六十二代目の畜産学科統一本部櫓装飾部門での活動ができた事は、大学生活においてとても大きなものとなり心の中は達成感で満たされています。

来年度の櫓装飾はこの思いの全てをぶつけ、私達に出来るものを精一杯作り上げて行きたいと思います。



研究棟アート

研究棟アートとは、研究棟の壁一面に巨大な絵を掲げ、収穫祭が間近であることを知らせ、より多くの人に来ていただきたいと作られたものです。

この絵は縦15メートル横1.2メートルの白い布を10本繋ぎ合わせることによって出来上がります。その大きさは約14平方メートルにもなります。この絵のように研究棟アート部門みんなで力を繋ぎ合わせ、1つの大きな収穫祭を作り上げていこうという願いも込められています。

今年は校内からも見える場所の絵は2年生が担当し、湘北短大側の2枚の絵は3年生が担当しました。湘北短大側の2枚には、例年にない夜にも絵が光るという仕掛けを取り入れ素晴らしい絵が完成しました。

去年は、台風の影響で絵が破れてしまうというアクシデントがありましたが、今年は固定する縄の本数を多くすることで問題を解決しました。去年のことがあったので、収穫祭の間ずっと絵を掲げることができてとても感慨深かったです。

今年の作業が例年よりスムーズに終了したのは、多くの方々の協力があったからだと思います。このアートを通してみんなの力が一つとなり、収穫祭の成功への祈りやこの収穫祭が全て手作りの文化祭であるということも皆様にお伝えできたことと思います。



家畜苑

家畜苑とはただ単に可愛い動物たちの展示ではなく、普段私たちの食卓に並ぶお肉を提供してくれる動物たちの事を皆様に理解していただく場所です。農業や食育が竜目される中、子供や保護者の方にも興味をもっていただけるよう、わかりやすく楽しんで学べるような空間を目指しました。子供が楽しみながら覚える事ができるように、家畜ごとに説明やどのように利用しているのかを写真や図を使って展示し、きちんと読んでいただけるよう○×ゲームを実施し、保護者の方には肉や卵がどのような経緯で皆様のもとに届くのか知っていただくために、生まれてから出荷までの期間やサイクルの展示をしました。

また、鶏の雛に触れる場や子牛のブラッシングの場、バター作り体験の場を設け、普段ではなかなか触れることのできない『家畜』と共に『命』を感じてもらえるようにしました。今回の家畜苑への来場をきっかけとして家畜の存在を知っていただくとともに、私たちの生活は彼らの命と引き換えに成り立っているということを忘れないでほしいです。



【結果発表】

体育祭

総合順位……5位（醸造学科と同率）

競技の部……3位（農学科、醸造学科、食料環境経済学科と同率）

各学科対抗リレー（女子の部）……3位

応援合戦の部……4位（栄養学科と同率）

櫓装飾……8位

神輿……優秀神輿

東京農業大学農学部畜産学科畜友会
“畜友会” 会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究会発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発刊
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。

(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員ならびに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。

(1)会　長　1名
(2)副　会　長　2名
(3)執行委員
　委　員　長　1名
　副委員長　2名
　庶　務　2名
　会　計　2名
　企画・渉外　2名
　編　集　2名
　監　事　4名

第七条　(1)会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条　(1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条　役員および連絡委員の選出および任期
(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。
(2)執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事はほかの役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。
(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。
(4)連絡委員は、各学年（1、2年次）および各研究室（3、4年次）で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章　総会

第十条　(1)総会は定期総会とする。
(2)総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。
(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。
(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の4分の1以上の同意を得て開催目および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条　総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条　(1)総会は正会員および特別会員の4分の1以上の出席により成立する。
(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の5分の1を上限とする。

第十三条　(3)委任状の検査は執行委員が行う。
定期総会は次の事項を決議する。
1．前年度の事業報告および収支決算報告
2．次年度の役員
3．次年度の事業計画および収支予算
4．会則の改正
その他

第十四条　総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条　議長は書記2名と議事録署名人2名を選出す

る。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条　総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条　総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章　執行委員会および連絡委員会

第十八条　(1)第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条　執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条　執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条　執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文章で必ず報告する。

第二十二条　連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2)連絡委員会は次の事項を処理する。

1．執行委員会で決定した事項の伝達。

2．一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することが出来る。

第二十三条　本会の事業年度および会計年度は6月1日に始まり、翌年の5月末日までとする。

第六章　会計

第二十四条　本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあてる。但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条　(1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

(2)会費は会長および委員長連名で毎年6月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条　(1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。

(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条　(1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。尚、内規は別に定める。

(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は、昭和35年6月29日に制定された東京農業大学畜産学科〝畜友会〟規約を平成元年7月7日に一部改正し、それを元に平成10年2月20日に新たに東京農業大学農学部畜産学科〝畜友会〟会則を制定し施行する。

本会則は、前会則の一部改正し、平成23年6月23日より）これを施行する。

畜友会収穫祭内規

第一章　目的

第一条　本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。

第二条　収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条及び第9条に基づく収穫祭に参加する。

第二章　組織および役員

第三条　収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。

1. 統一本部
2. 宣伝隊実行本部
3. 特別企画実行本部
4. 学内装飾実行本部
5. 家畜苑実行本部
6. 体育祭実行本部

第四条　実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

統一本部顧問　若干名
統一本部委員長　1名
統一本部副委員長　1名
統一本部会計　1名
各実行本部顧問　若干名
各実行本部委員長　各1名
各実行本部会計　各1名

第五条　(1)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より畜友会会長がこれを委嘱する。

(2)統一本部委員長は畜友会執行委員、統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部委員長および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、畜友会会長の了承を得てから委嘱する。

(3)統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

第六条　(1)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(2)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者と協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。

(3)各実行本部委員長は各実行本部の運営を担当する。

第七条　実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。

(1)6本部会議は、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部

会計ならびに各実行本部委員長、で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。

(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部委員長および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部委員長がこれを務める。

第三章　会計

第八条　収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九条　予算は畜友会執行委員会で編成し、畜友会定期総会で承認を得る。

第十条　会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一条　決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章　付則

第十二条　本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会で承認を得る。

第十三条　本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。

本内規は前内規を一部改正し，平成23年6月23日よりこれを施行する。

各部門委員長より

本音。

統一本部委員長
3年　榊原　啓太

もう3年。今年になって、先輩たちがみんなして口にするこの言葉の意味がやっとわかった。だから最後である今年はじっくり楽しみながらシーズンを送りたかったけど、むしろ1、2年の時より忙しくて、余裕も全くなくて、「あっ」という間だった。今だから笑って話せるけど今年の収穫祭シーズンは始まる前から泣きそうだったわ！

なぜかというと、僕らが大学一年で畜産学科統一本部に入ってから体育祭では準優勝、総合優勝。そして、やっときた僕たちの年…。もちろん、尊敬できる先輩たちと一緒に頑張った日々は一生の思い出です。だけど、先輩たち凄すぎでしょ!!もうプレッシャーでシーズン激やせですよ！　ただ、統一委員長である僕はみんなにそれを悟られぬよう無理して毎日がんばりました。少なからず、3年生のみんなは似たような心境だったんじゃないかな。

ここだけの話、16学科で畜産学科の統一委員長が一番大変だと思う。なぜかというと、みんながみんな個性が強い！終夜が始まってからは、寝不足や作業が思い通りに進まないなどで個人個人に余裕もなくなってきて、ときには部門でぶつかり、ときには学年でぶつかり、部門内でもぶつかり、もうぶつかってばっか。よく毎晩一緒に炊き出し食ったり、作業ができたよ。笑

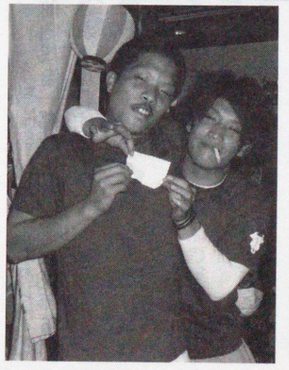
だがしかし!!最後は不思議とまとまる畜産統一。収穫祭!!みんなで特別企画楽しんで、空き時間は家畜苑手伝って、野菜も配って、さらに体育祭!!牛が猛る櫓のもとに集い、競技・演舞で他学科に畜産の存在を知らしめる。最後の最後まで畜産学科が総合優勝だと思ってたぜ！

新1年生は入ってからのお楽しみ。初々しい1年生、色々と騒がしいけど楽しい2年生、それよりも騒がしいけど頼りになる3年生。こんな統一委員長についてきてくれて本当にありがとうございました。もう1度はやりたくないけど、一生に一度の最高の思い出ができました。また来年、後輩たちがつくる畜産学科統一本部が楽しみです。



……でも、やっぱり総合優勝したかったな。みんな、飲もっか！

こんな粗末な文のあとですが、鈴木学科長をはじめとする諸先生方におかれましては今年一年多大なご協力を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



俺とっき、お前は？

特別企画委員長
3年　中塚　武利

今年、私たち特別企画は3年生4人、2年生1人の計5人で活動し例年に従い、来場して頂いた多くの親子が毎年参加する「○×ゲーム」、学校の中で運命の相手を見つける「相思相愛」、そして畜産学科のメイン企画となる農大のミスターとミスを決める「NBC -Nodai Beauty Contest-」を行いました。また今年は例年と違い農、畜、セラ3学科で何かやろうということで「花ざかりの君たちへ　～コスプレ☆パラダイス2001～」というコスプレコンテストを行うことになり畜産学科の特別企画が、人数が多いという理由でコスプレコンテストの全体把握を請け負うことになり、収穫祭1日目の本番では多くの方々に見に来ていただき成功を収めることができました。

今年は上に立ったことや企画が1つ増えたこともあり、本当に大変でした。夜、一睡もできない日があったり、自分の企画が思ったより進まずイライラしたりとみんなの企画を手伝うどころか逆に迷惑をかけてしまいました。それでも、みんなのおかげで今年も愛しの場となる楽しい畜とっきの雰囲気を作ることができました。

またこの場を借りて畜とっきのみんなに一言

椎名へ
家庭の事情もあって色々と大変だったと思うけど、今年畜産のメイン企画のNBCおもしろかった。お疲れ。

聖弥へ
ハート作りとかあんま手伝えなかったし、後輩の世話もしてもらったし、本当に助けられた。ありがとう。司会は下手だったけど、特企でのMCは完璧だったよ。

紗弥佳へ
司会も去年と比べ物にならないくらいうまかったし、作ってくれた背景も最高だった。いつも個性的なキャラで盛り上げてくれてありがとう。

くろへ
本当にお疲れ様。今年は2年生1人ってことで司会や背景作り、全体把握と全部やってもらって、最初2年生1人だし女の子でキャラの濃い特企で大丈夫かなって思ってたけど、作業が始まると自分から「今日なにしますか？」とか「なにかやることありますか？」って聞いてきてくれてうれしかった。それに後輩とは思えないくらい接しやすくて楽しかった。今年本当に良い後輩をもったなって思ってるよ。来年大変だと思うけど、困ったことがあったら力になるからね。

畜産だけでなく、今年は農、畜、セラ3学科そして総務部とみんな仲良くて、一緒に買い出しに行ったり、ご飯食べ行ったり、作業したりと毎日が本当楽しくて充実していました。畜とっき、そして農、セラの他学科統一特企、総務特企、かけがえのない最高の仲間たちと最高のステージ、そしてこれ以上ない最高の思い出を作ることができました。ありがとう。





NO MILK NO LIFE

宣伝隊長
3年　竹内　薫

まず始めにタイトルと本文は特に関係ありません。

去年の交代式で委員長法被を渡され、私たちの時代が始まりました。

私は先代の先輩のように人を引っ張れるわけでもなく、周りの気持ちに気付いてあげられるわけでもなく、隊長には向いていないと思っていたので、あのとき受け取った法被の重みは100kg級でした。

でもそんな私の中の小さな目標は「今年1年やってよかった」って思えるくらい頑張ることでした。良い収穫祭を創り上げるためには、まず自分たち自身が楽しんで宣伝活動をしないと気持ちは伝わらないと思うから。だから私は自分自身プレッシャーも含めて全部楽しもうと決めていました。

宣伝隊は3学科合同の部門で、応援団の新田くんと田中くんもいて、1年間フルで活動するからとってもストイック。予算を立てて毎週会議をして、ビラや参加するイベントについてなどなど話し合うことは盛りだくさん。今年は種詰めをしないでビラを作れるよう計画を練りました。厚木パレード、各駅宣伝、店周り、イベント参加のためのアポや許可証を取りに行ったり、ひたすらビラを作ったり、いろんな作業があって、うん、やっぱりとってもストイック。朝から夜までめまぐるしく活動しました。そりゃもう時給が発生していたら大金持ちになっていたと思います。さすがにめげそうにもなりました。

宣伝隊としては、今年は「去年同様」って言葉が通用しない1年でした。一から創り上げることがこんなに難しいだなんて思わなかった。でもその分かける情熱も違って、みんなで一つの目標に向けて本気で頑張れるって、こんなすごいことってないと思います。

各駅宣伝や店周りでビラを配るとき、作った身としてビラ一枚一枚に愛着が湧いていて、地域の人にビラを受け取ってもらえると嬉しかった。「農大さんね！いつも収穫祭行ってるよ。」「頑張って！」という声が聞けることは宣伝隊の醍醐味です。地域の人との繋がりを肌で感じました。

今年の収穫祭は来場者数は約3万6千人で、目標としては及びませんでしたが、みんなで一生懸命に充実した活動が出来てよかったと思っています。

3年生のかた、郡山くん、ほり、私たち個性が強すぎて衝突してばかりいたけど「気負わなくていいよ。俺らが荷物半分持つから。一緒に頑張ろう。」って言ってくれて、その言葉があったから最後まで駆け抜けることができました。

2年生のしょーへー、あやちゃんはとっても優秀で気が利いて頑張り屋さんでした。バトンタッチだよー！今年の良いと思えたところは受け継いで、だめなところは反面教師ってことで見習っちゃだめだからね！

とーっても色濃い月日でした。もう一度やりたいとは思わないけど、やってよかったって心からそう思います。みんなはどうだったかな。私を支えてくれたみんな、ありがとう!!

最後に参与の先生方を始めとする諸先生方、並びに収穫祭実行本部の皆様、研究室の皆様、この第12回厚木キャンパス収穫祭を無事に終えることができましたことをこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。





今年の神輿作製記

神輿隊長
3年　佐藤　晋介

昨年、畜産学科の神輿は最優秀賞という素晴らしい賞を頂いた。この結果を聞いた時自分は嬉しさとともに来年のプレッシャーを背負わされたのである。自分の中では畜産学科神輿の伝統を主とした去年の神輿と同じでは二年連続一位は獲れないと思っていた。だから今年は今まで先輩たちが築いてきた畜産学科の神輿の伝統を残しつつ何か新しい自分たちにしかできない個性的な神輿を作りたいなと思っていた。しかし、作製当初はそこまでアイデアは浮かばず、とりあえず形だけ決めてデザインを考えつつ神輿を造っていった。

作業は昨年と同じで夏休みの初めから始めた。作業自体はスムーズに進み思い描いた通りの神輿ができあがっていった。自分は繊細さに欠けるところがあり不器用なので少々荒っぽくなったところもあったが、そこはメンバーがカバーしてくれた。段々メンバーにも役割が出来ていってそれぞれが何も言わずとも自分の担当の作業をしていってくれるようになった。本当にできるメンバー達である。完成式まで残り一週間たった時自分の中であるアイデアが浮かんだ。「この神輿を動かせたら面白いんだろうなぁ…」幸い神輿の柱を六角形で組んでおりその中に粘土で作った牛、豚、鶏の三大家畜を入れており、それをメリーゴーランドみたいに廻すことができるのでは…と思った。しかし完成式は近付いていたのでとりあえず第一段階の神輿を完成させた。そして完成式当日、統一の皆、OB、他学科の統一の神輿メンバーが集まってくれて、自分たちが造った神輿を褒めてくれた。嬉しかった。でも自分の中では完成しておらず完成式という感じは全くなかった。厚パレが無事終わり、本当ならば神輿の作製はここで終わりだったのだが、さらにこの神輿を機械仕掛けにするために収穫祭・体育祭まで残り一カ月、作業は延長することになった。

「自分のエゴで作業を延長させていろいろな人に迷惑をかけて本当に申し訳ないと思っています。」

設計図は大まかにできていたが実際その通りにはいかず、同じ機械が好きな後輩（タカ）と試行錯誤しながら作っていった。その試行錯誤が楽しすぎて時間が経つのが早いと感じるくらい寝る間も惜しまず神輿をいじっていった。物を作るのってこんなに楽しい事なんだなぁと思った。

そして収穫祭当日、完成した神輿を展示した。モーターを電池で動かしていて、バッテリーが一時間も持たないし機械なので、何回も神輿の様子を見に行きメンテナンスを行った。厚木での神輿の一般投票は最優秀賞を頂いた。各学科素晴らしい神輿だったので不安だった。だからこそ最優秀賞をもらって嬉しさと安心さがあった。体育祭では、銀賞を頂いた。金賞ではなくて悔しかったが自分たちがやってきたことが認められた気がしてすごく嬉しかった。

最後に知里、未由ちゃん、タカ、こんな自分が隊長で頼りなかったかもしれないけど文句言わずついてきてくれてありがとうと言いたい。





怒涛の日々

体育祭委員長

3年　青木真帆

体育祭のために活動してきた二年間。

きっかけは、一年生の時に経験した体育祭。一年生の時は、毎日毎日遅くまで応援合戦の練習をして、何故ここまで体育祭に力を入れるのか正直わからなかった。しかし体育祭を終えたとき、この答えはすぐにわかった。言葉にはできないくらいの感動、達成感を知り、この瞬間のために頑張っていたのか！と納得しました。だから畜友会に入るなら体育祭部門に入りたい！そう思ったのが私の体育祭生活の始まりでした。

シーズンが始まるよりもずっと前から、私は体育祭のことで頭がいっぱいでした。先輩の麻琴さん、絵美子さんのように体育祭までやっていけるか、私なんかに委員長が務まるのか不安で仕方ありませんでした。悩んでいても時間は過ぎていき、5月から体育祭メンバーでの会議、夏休みからは本格的に準備が始まり、休みのない毎日が始まりました。今年は震災の影響で終夜期間が短くなったり、体育館使用時間が変わったりと去年と違うことがあり、混乱することも多く大変でした。

体育祭部門は、唯一全員と接する部門。つまり、みんなの疲れや体調を一番に感じとれる部門だと思っていました。だからこそ、楽しく体育祭練習をしたい！同時に、私達が疲れや焦りを見せちゃいけない！と思っていました。ちゃんとできてたかな？少なくとも私は、みんなとの90分間の体育館練習は楽しい時間でした。

体育祭を終えて、私は体育祭部門で本当に良かったと思いました。去年の先輩方の優勝を繋げなかったことは悔しいですが、みんなと一緒に応援合戦、競技を頑張ることができ、畜産学科の応援合戦が一番だったよ！って言っていただけただけで、私は幸せです。今まで頑張ってきた甲斐があったと思いました。





最後に、みんな自分の部門もあるのにスパルタな体育祭練習に付き合ってくれて、頑張ろっていつも元気づけてくれて本当にありがとう！時には話聞いてくれたり、馬鹿やって笑わせてくれたり、みんなの元気とやる気で頑張れた気がします。まや！私がしっかりしなくちゃいけないのに頼りになら なくて、いつも頼ってばっかりで、いっぱい迷惑かけました。まやが相方で本当に良かったです。みらい、やすこ！夏休みからの作業で、不満もあったと思うけど文句も言わずにいてくれて、踊れなかった人を個人練習で次の全体練習では見違えるほど上達させちゃったり、無茶なことも二人だからお願いできたんだと思う。来年の体育祭が今からすごい楽しみです！本当に体育祭の三人には感謝しています。こんな私が委員長だったのに、支えてくれて本当にありがとう。楽しかったです！

畜友会で過ごした三年間。辛いこともいっぱいありました。けど、それ以上に楽しかった事の方が多かったです。畜友会に入って、みんなに出会えて、みんなと一緒に過ごした時間は大切な思い出です。みんな大好きです。今まで支えてくれた皆様、本当にありがとうございました。

力強さを求めた櫓

櫓装飾委員長

3年　小林由音

「筋骨隆々でいかつく描きたい」

そんな漠然としたイメージだけを持って、今年の櫓は夏休みからスタートした。

本当は、仕掛けとか、絵をでかく見せたいとか、いろいろ考えていた。けど今年から仕掛けなし、文字パネなし、と夏直前に決まったので、漠然としたイメージだけの出発となってしまった。しかもメンバーは、3年は私一人、2年も一人。不安な中での出発だった。

とりあえず、私は畜産学科が勇ましく戦っているイメージで、牛2頭、豚、鳥を描いた。またそんなイメージを「剛毅」という言葉にし、絵の中にいれた。

豚、牛は2年の吉原さんが担当。牛、鳥は私が担当。「筋骨隆々」だけを頭に入れ、あとは自分たちが描きたいように、自分が乗っているときに描く。そういう指示だけで進めていった。今思えば無茶振りのようだけど、吉原さんはうまく掴んで描いてくれた。でもやっぱり、2人だけだと私は不安だったし、場所も体育館下で寂しかった。うまく描けない時、そんな時は違う部門の人が見に来てくれ、相談に乗ってくれた。みんなだって辛いのに、って分かっていたけど、いっぱい甘えてしまった。そんな支えもあってか、なんとか完成日に仕上げることができた。パネル設置の時は、隙間ができないように一枚一枚丁寧に貼り付け、穴あけを手伝ってもらった。設置し終わったのはもう夕方すぎだったけど、その暗い中でも絵を眺めたら、「これは櫓の2人だけでつくれたものじゃない」と心の底から思えた。ほんとにみんなありがとう。結果は8位と厳しいものだったが、私には自己満だけれど一番、学科の特徴らしさ、力強さが出ていたと思う。そしてこの畜統メンバーだったからこんなに支えてもらえたと感謝している。この感謝を結果で伝えられなかったのは正直悔しいし、悔しすぎるけど、、来年はまた、櫓の大きさが未定だけど、そんなのにとらわれず、自分の描きたいもの作ってほしいよ、まよ!!一緒に刷毛持ってくれてありがとうね！





ミシンの神様

装飾委員長
3年　鈴木　雄太

小3の頃からなぜだかおばあちゃんと暮らしていたわけではないが、大学2年の頃からなぜだかミシンを必死で動かしていた。そう、これが私の畜友の始まりでした。

大学2年の夏、私は装飾なんて色塗りをしながら楽しくやれればいいだろうと甘い考えで入ったので、毎日ひたすらミシンをカタカタ動かす作業に疲れきっていました。あまりにミシンをやりすぎて、自分と同い年でこんなにミシンが上手いやついるのかと思ったほどです。それでも垂れ幕に一気に下書きを書き、少しずつ色が塗られ、完成してみると自分がこんな凄い物を作っていたのか、こんなにたくさんの人達に見てもらえるなんてと達成感でいっぱいになりました。装飾の素晴らしさを知りました。

3年になりついていく立場から引っ張っていく立場へ。先輩の凄さを改めて実感しつつ、自分にはうまく引っ張っていくことが出来ないので自分らしく楽しくいつでも笑って作業できるようにとみんなをまとめていきました。

去年は毎日みんなで一生懸命作った垂れ幕も台風の影響で1枚は完全に破れてしまい他の2枚もところどころ欠けてしまいました。今年はその悔しさをバネに頑張り、布の構造に改良を加え、垂れ幕に夜でも光るようにと仕掛けもいれました。そして台風にも負けない様にと風神雷神のデザインにし、風も雷も味方につけるんだという自分の願いをこめました。

結果は無事天候にも恵まれ収穫祭当日まで1枚も破れることなく飾り続けることができました。夜うまく光ることはできませんでしたが多くの人に収穫祭を宣伝することができ、また収穫祭を外からも内からも盛り上げることができました。

今思い返すと、なんであんなにも大変な作業ができたのか不思議に思うことがあります。それでもあれだけ大きな物を作った達成感は素晴らしく、体育館で布を広げた時、そしてなにより研究棟から布を垂らした時の感動は忘れられません。今までの疲れや苦労が一瞬にして吹っ飛ぶんです。そして毎朝湘北短大側から学校に来る時、徐々に見えてくる垂れ幕はほんと誇らしく、ずっとずっと魅入ってしまうんです。

こんな凄いのを作れたのも大変な作業を楽しくできたのも畜友のみんなのおかげです。特に3年生とはいつもふざけあってばっかだったけど感謝の気持ちでいっぱいです。そしてゆう、ちーちゃん、ついてきてくれてありがとう。来年は任せた。最後に阿久津、ほんとお疲れ様。一緒にやってこれてほんとよかった！

畜友にはそれはそれは最高の青春があるんやで！





最高の家畜苑

家畜苑委員長（苑長）
3年　猪瀬　真宏

今年の収穫祭は、2日間とも天気がよく最高の家畜苑を来場者の方々に見せることができました。毎年、富士農場から家畜を借りて展示していましたが、去年は、春に発症した口蹄疫の影響で展示する家畜の頭数が少なかったですが、今年の家畜苑では、リャマ2頭、牛（ホルスタイン種1頭、ブラウンスイス1頭、黒毛和種2頭）4頭、ミニブタ4頭（子豚3頭）、羊2頭、家禽14羽、ヒヨコ15匹という多くの家畜を富士農場や各研究室の協力を得て、展示することができました。

今年も去年に引き続き、バター作り体験や○×クイズ、ふれあい体験などの企画を行いました。バター作り体験は、とても人気があり、家畜苑の目玉企画となりました。そのバター作りや家畜の説明文などを担当してくれた家畜苑のアイドル槙ちゃん！笑顔が素敵！いつもみんながその笑顔に癒されてました。かわいいプラ板作ってくれてありがとう！続いて単管組立や丁寧に顧問の先生方やメンバーの名前をバックボードに書いてくれた重！妥協せずに文字をきれいに書いてくれましたね。作業中にみんなをまとめて指示してくれて助かりました。ありがとう！またまた続いて、二年連続で門を担当した純平！きみのアドバイスのおかげでとてもインパクトのある立派な門が完成できました。終夜で疲れているのにいつも周りを明るくしてくれてありがとう！続いて、鳥小屋担当した耕平！毎日遅くまで作業？をしていましたね（笑）当日の朝ギリギリまで鳥小屋やってましたね。僕はとてもハラハラしてました。でも完成しましたね。ありがとう！続きまして二年生！バックボードの絵を担当した淳史！君の絵の上手さにはびっくりしました。来年は苑長としてみんなをまとめて最高の思い出を作ってください。分からないことがあったら村田先生に相談して下さい！ありがとう！続いて門を担当した捷！門はいろいろ手直しなどもやったりして大変だったと思うけどあの門は最高だった！来年も頑張ってください。ありがとう！続いてバター作りや小物を担当してくれた今井星良！かわいい顔パネ子供に人気でしたね。来年は単管組立も頑張ってください！ありがとう！そして、手伝いに来てくれた一年生！作業も早くてほんとに助かりました！ありがとう！

最後に、頼りない委員長だったかもしれなかったけど、みんなついてきてくれてありがとう！畜友会での最高の思い出になりました！家畜苑最高――――!!!!



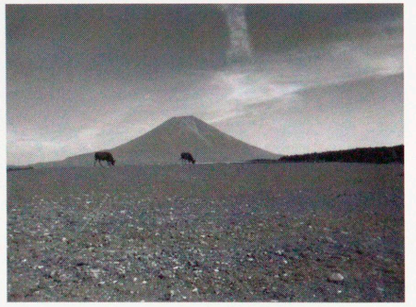












編集後記

今年も、第48号目となる「ふじみの」を発行することができました。

第12回収穫祭は2日間、両日共に天候に恵まれ、たくさんの方々にご来場いただき、大盛況に終わりました。農大独自の学生の力のみで一から作り上げる収穫祭のスタイルも年々色濃く、地域の方々に浸透してきたのではないかと思います。

この「ふじみの第48号」が、今後の畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

また、このたびの東日本大震災により、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の1日も早い復興をお祈り申し上げます。

最後になりましたが、この一冊を発行するにあたり、お忙しい中ご寄稿くださった先生方、学生の皆さん、ならびに会員の方々に深く御礼申し上げます。

編集委員長　3年　竹内　薫

平成24年3月20日　発行

“ふじみの”第48号

ふじみの執行委員　竹内　薫
宇畑　泰子

発行者　神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学農学部畜産学科畜友会
電話 046(270)6220(総務課)

印刷所　東京都荒川区西尾久7-12-16
創文印刷工業株式会社
電話03(3893)0111



TOKYO NOUGYO DAIGAKU CHIKUSAN-GAKKA

